

# 小田原史談

第250号

発行所 小田原史談会  
小田原市南町 4-1-24  
松島方 TEL (23) 8635

## 《講演録》

### 後北条以前の小田原(上)

政治、社会状況からみる鎌倉・室町時代の小田原地域

京都造形芸術大学准教授 野村 朋弘



敗者の歴史を復元する

鎌倉時代の古文書は全部で何  
通ぐらいあると思いますか？

『鎌倉遺文』という翻刻史料  
集がありますが、一一八五年か  
ら一三三三年までの間でおよそ  
三万五千通。一五〇年間で三万

五千通を多いと見るか少ないと  
見るかですが、一五〇年で割っ  
てみると実は少ないんです。時  
代が古くなるほど残された史料  
は少ないことになります。これ  
に対して江戸時代の史料は一説  
には三〇億通あるといわれてい  
ます。

今日は小田原の後北条氏より  
もっと前の話になりますが、史  
料はそんなに多くありません。  
なぜかといえば、時代が古いの  
に加えて、基本的には敗者の歴  
史は残らないからです。後北条  
以前の時代は後北条に滅ぼされ  
てしまっているわけです。後北  
条も徳川家康や豊臣秀吉に負け  
たわけですが、家臣達は生き残  
っている。後北条が発給した  
文書は多く残って後北条の研究  
は進みました。ただそれより前

になつてしまうと非常に史料は  
限られ、数点しかない史料の中  
で考察することになります。  
今日お話しする内容は敗者の歴史  
を再構築するということです。

中世は中世のことだけをやれ  
ば良いかというところ、そういうこ  
とはなく、歴史学で重要なこと  
は時間軸でとらえる必要があり  
ます。「その時歴史が動いた」と  
いうテレビをご存じですか。そ  
れと同じように、時間軸の中で  
どんなことが起きたのかを調べ  
るのが歴史学のやり方になります。

また、重要なのは地域性にな  
ります。小田原があつて東に行  
くと鎌倉があつて、さらに北に  
上ると平泉があつて、西の方へ  
行くと京都・奈良から博多、朝  
鮮半島、中国大陸へというふう  
に地域が広がっています。例  
えば、後北条氏より前の小田原  
のことをやろうと思つていても  
それだけでできるかというところ  
してそうではない。小田原のこ  
とを知ろうとすれば、鎌倉のこ  
とも、京都のことも知らなけれ  
ばいけない。さらには政治体制、  
社会制度、荘園制度、土地制度、  
宗教・文化などがすべてお互い  
に影響を受けているので、歴史は構  
築されているので、それを含め  
た上で話が生み出されることにな  
るわけです。

二百五十号(平成二十九年七月号)

## 目次

### 《講演録》

後北条以前の小田原(上)

政治、社会状況からみる

鎌倉・室町時代の小田原地域

野村 朋弘…………… 1

透谷をさぐる

岸 達志…………… 7

富士フィルム草創記(二)

森田茂吉の決断

荒河 純…………… 8

駅前旅館「重乃井」のこと

— 女将の語る小田原駅前 —

語り手 佐々木 初枝…………… 14

二宮尊徳と「論語」(二)

岩越 豊雄…………… 18

忘れられた地名(四)

「新宿・古新宿」

杉山 虔…………… 13

片岡日記 昭和編(十)

片岡 永左衛門…………… 24

旅のつれづれ俳句日記

剣持 芳枝…………… 20

多古廻りの半日

青木 良…………… 21

多古の悪ガキの思い出(二)

中村 泰良…………… 23

新会員紹介・募集

…………… 17

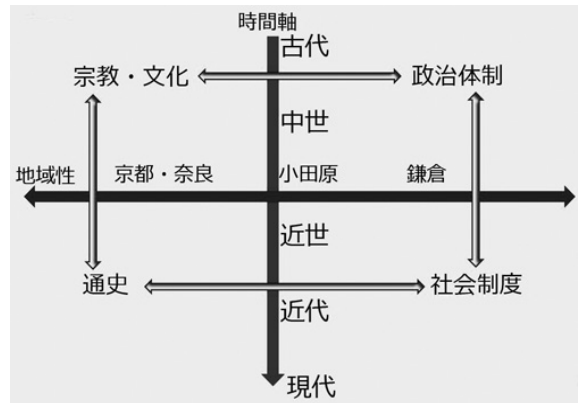
秋の史跡巡り予告…………… 27

平成二十九年年度総会報告…………… 26

特別賛助会員・落穂集…………… 28

今日、話をするのは中世の小田原という短い範囲になるんですが、歴史というのはメジャーなところ、史料が残っているところから発展していくわけです。古代から現在までの小田原の中で、後北条氏がいた期間は約百年です。有史以来つまり律令制度ができた七世紀から現在までの中で、たった百年しか後北条は小田原にいないわけじゃないです。それ以外は後北条ではないわけですが、ただ、後北条は一番良質な史料が残っていて、かつ著名であるので、小田原という後北条ということになっていくわけじゃないです。

中世における小田原の変遷というのは、端的にいつてしまう



と、中村党の土肥氏、駿東郡の大森氏、後北条氏と在地の領主は変わってきて、最終的には豊臣秀吉の小田原征伐で関東における中世の終焉ということに至るわけじゃないです。

しかし、関西における中世の終わりは一般的に織田信長が京都に入ったときになります。永禄十一年(一五六八)がほぼ中世の終わり。関東は戦国大名として後北条がずっと残っていたのでさらに二十年ぐらいあとになって一五九〇年になってから中世が終わります。

例えば昭和の文化が平成になった途端に全部入れ替わるかというところではないんですね。もっと前の昭和や大正の文化が色濃く残って創られているわけです。今の学部生は平成六年とか八年とかの生まれですが、昭和を知らない子供たちは親から物事を教えてもらったりするわけで、親御さんは当然、昭和の文化を色濃く伝えます。なので、時代が変わるときに全てがきれいに変わるのでは決まてないんです。

例えば、大森ならば大森氏の影響が後北条になっても残りまじすし、それ以前の土肥氏の影響というものは大森氏が入ったといっても残ります。その中で残されてきた大森なら大森の痕跡、

土肥なら土肥の痕跡ということ。後の史料からも探すことができます。同時代史料の鎌倉・室町の史料を読むのが一番いいわけですが、それ以降の後北条になつてから、もしくは近世になつてからの史料も妥当か厳密に判断した上で、使えるものを使って構築していくということになるんです。今回は、『小田原市史』の史料編・原始古代中世Ⅰと通史編・原始古代中世の研究成果に学びつつ、話をしたいと思えます。

#### 古代から中世の小田原

古代から中世の小田原を振り返ってみましょう。

古代の小田原、相模国というのは、大化の改新の国郡制定で、相模国(さがむこ)と師長国(しながこ)とが合併し設置されています。昨日(五月五日)、六所神社でやっていた国府祭(こうのまち)などはまさに、その影響をもちに受けています。『延喜式』によると足上・足下・余綾(よろぎ)・大住・愛甲(あゆかわ)・高座(たかくら)・鎌倉・御浦(みうら)の八郡があったわけじゃないです。相模文化圏というのは東部の相模川流域が中心で、海老名・厚木・寒川・平塚・茅ヶ崎になります。もう一つの師長の方は酒匂川の流域で、小田原、南足柄、

中郡が中心になっているわけじゃないです。

鎌倉・室町の小田原地域というふうになりましたが、小田原地域の枠組みが昔からあったわけではありません。小田原は足下郡が中心ですが、深く関わる河勾荘は余綾郡に属します。ですので、今日はちょっと幅広く小田原市内以外のところまで付け加えて話をしたいと思います。箱根・足柄は相模と駿河の境界線ですが、もっと重要なことは、京都・奈良から見て中国と遠国との境目なのです。相模以東になると遠い国になるのです。駿河までは中国。中央政権から見ると相模以東は遠い場所として考えられていたわけじゃないです。

#### 「をたわら」の初見史料

小田原の名称はいつ出てくるかというところ、結構後になって出てきます。横浜市金沢区に称名寺というお寺があり、その横に博物館の金沢文庫があります。今は国宝に指定されている称名寺の古文書、もしくは金沢文庫古文書と言うんですが、その中に収められている鎌倉時代の後期の書状の中に「をたわら」と書いてあります。これが「をたわら」の初見ということになります。どんな書状かというところ、これ自体は散らし書きと呼ばれ

る書き方で書状が書かれています。翻刻史料を以下に示します。

(前略)

「ゑんしん(円信)の御房にたしかにまいらせ候て給候と申て候しに候、さて御二所まいりの人にちかいまいらせ候はんと、よたち(夜立)して候し事も、とくく申てわらわれまいらせたくこそ候へ、御まいるりの人ハ、をたわら(小田原)と申候にと、まり候しに候、返二もいかにおぼつかなくおほしめされ候らんと思まいらせ候て、くたり人や候と、みちにてもミはりともみいたしたる事も候ハて候つるに候、このよしを申給へく候、又御かた・くま殿・こま殿申たく候、

「御二所まいりの人」とあります。鎌倉後期には二所詣でが鎌倉から多く行われていますので、小田原地域は中継地点として使われるようになっていったのだろうといわれています。「ゑんしんの御房」とありますが、「ゑんしん」は僧侶の名前です。彼の書状が嘉元三年(一三〇五)に残されているので、おそらく、その同時期だろうと考えられます。よって、一三〇〇年代にはもう「をたわら」という名称はあったのではないかと思われまます。ただ、この書状を見

てわかる通り、署名とか日付が無いので、この文書一枚だけでは年がはつきりしないということとはあります。

金沢文庫文書については、鎌倉後期の政治状況や宿場など、変化がよくわかる古文書なので重要視され、国宝に指定されています。

鎌倉時代の史料は『鎌倉遺文』を中心にほぼ活字化されています。『小田原市史』や『鎌倉遺文』などで翻刻されているので、翻刻された史料を読んで内容を検討します。ただ翻刻するのは人間ですから、間違いがあるかもしれないかもしれません。そこで、元の史料原本も確認する必要がありますが、まずは活字史料を読むということとなります。

鎌倉時代の史料は、どんな文書が残るかという点、多くは土地の証文であったり、裁判に関するものです。しかし、今回あげた金沢文庫の古文書が何故遺されているかという点、この文書の裏に、後に聖教(しょうぎょう)が記されたからです。

当時、紙はとても貴重でした。最上級の紙は現代の値段でいえば一枚三、四千円くらいでしょう。鎌倉北条氏は鎌倉時代における最高クラスのお金持ちです。天皇家よりお金持ちなので、最も上等な紙を使っていました。

いい紙を使って「お茶美味しかったありがとう」などとさらっと書いてある。受け取ったお寺としては勿体ないですよ。一枚数千円もする紙を廃棄するのは勿体ない。まして裏は白紙です。裏面を利用するため紙を叩きます。叩くと滲まないようになっています。滲まないようにしたうえで、聖教などを筆写し遺していました。いわば「をたわら」と記された書状が大切にされてきたわけではなく、聖教が大切だということでお寺に遺されていた訳です。その聖教を修復・調査してみたら、裏側に何と豊かな史料があるのだろうとなつて、現代になつてから本来の表側の書状が重要視されて研究されていくことになりました。

書状であれば年月日が無いものもあります。そうした古文書が山のようにあります。それを一枚一枚、人名比定や地名、内容を吟味して内容を読み解いていきます。分割された書状もあり、すべての書状の詳細が分かっているわけではありませんが。

但し今、小田原という初見の史料はこれですと、話していますが、今後、新たに小田原と記されたものと古い史料が現れるかも知れません。今のところは一三〇〇年代の嘉元年間に書かれたであろうこの「をたわら」

という書状が一番古い書状といわれています。

もつと前には小田原という名称があつたかどうかはつきりしません。例えば、「曾我物語」があるじゃないかと思われる方がいるかもしれませんが、「曾我物語」が編纂されたのは南北朝時代でこれより新しいのです。

#### 交通の要所としての小田原

あらためて古い時代に戻って、東海道はどこを通っていたかという点、基本的には足柄峠を越えるルートになるわけです。もともと内陸部を通っていました。道路というのは国家においてとても重要です。なぜかという点、税を回収しなければならぬ。運ばなければなりません。そのために律令国家が成立したときに、道路の整備が最重視されました。

ただ、内陸部では山のところを真っ直ぐ道を作っていくというのは至難の業です。古代において国のお金を使って道路を造っていたわけですが、当然のことながら常に維持しなければなりません。維持するためにはお金がかかります。維持できなくなると衰退してきます。そうすると、海岸線側の平坦な道が使われるようになっていくというように変化してきます。



そのため、足柄峠を越える東海道も海岸線の方のルートとなるわけです。下の地図に示すように、酒匂郷の横のところに引いてある線が道になります。中世においてはこの道が主要な街道として使われるということになります。

もともと、足柄峠が使われていましたが、延暦の富士山噴火(八〇〇〜八〇二)で足柄道が通行不可となった時に、箱根峠が開削されます。ただ、箱根は難所です。後世、天下の峻と呼ばれる程、険しいので噴火が収まるとまた足柄峠に戻りますが、中世になると足柄峠だけではなくて箱根峠も使われようになります。

中世の小田原地域の宿

平安時代までの物流はどうだったのでしょうか。都市つまり税が集り消費される場所というのを考えてみて下さい。古代に道が整備され、陸奥国、出羽国、もしくは武蔵国、相模国のような国から税が徴収されるとき、消費する場所はどこかという基本的には京都、奈良といった都市です。

中世になるとこれが変わります。鎌倉幕府ができるからです。中世の鎌倉は大規模な田島があるわけでもありません。猫の額

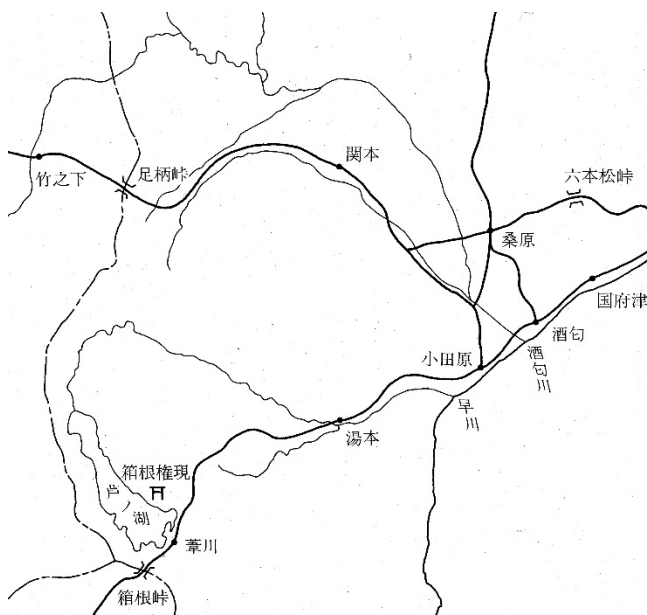
のような狭い中に、將軍や北条氏や御家人がいわば「ごちゃっ」と住んでいました。都市とは生産よりは消費の方が圧倒的に多いものです。こうして鎌倉も中世における都市の一つとなります。京都もこれまで通り朝廷がある消費地ですから、鎌倉と京都との往来が非常に盛んになっていきます。すると当然のことながら、東海道が非常に重要視されていきます。物が、武士が、貴族が移動する。ということでは街道筋の宿場が整備されていきます。

鎌倉前期においては、足柄道が官道です。鎌倉から国府津、酒匂、関本、足柄峠というルートで歩いていきます。これが、鎌倉後期になると箱根峠を越えるルートがメインルートに変化していくようになります。

鎌倉幕府の將軍に仕える貴族のことを関東祇候廷臣(かんとうしこうていしん)といいます。関東祇候廷臣は元来、京都に住んでいますが將軍に近侍するために鎌倉に向かっていく人たちです。源家將軍が三代で滅んだあと撰家將軍になります。撰関家の一つである九条家の頼経と頼嗣が將軍になって二代で京都へ送り帰される、六代將軍から最後の將軍までは親王、つまり天皇の皇子が將軍になります。源

家將軍というのは例えば頼朝は右大将・権大納言で、家格的に言えばそんなに高くないのですが、それに代わる撰関家や親王家になると、そもそのグレードが高い。例えば、六代將軍宗尊親王などは一品の宮になりますので、位でいえば一位です。鎌倉幕府の御家人たちの位は最高でも四位ですから、二位や三位の人がいない。そこで、鎌倉後期になると貴族たちは將軍に近侍するために、関東に下ってきます。何で近侍するために来るのか。無論、個別に主従関係がある場合もあると思いますが、祇候することによって役料といった何かしら供与されます。貴族たちもただで仕事をするわけではありませ

ん。鎌倉に来て近侍することによって、荘園が与えられたり、もしくは北条氏や有力御家人と繋がりができます。



鎌倉時代の西相模の交通路

(『小田原市史』通史編、原始 古代 中世より)

武家と違って貴族たちは日記を書きます。もしくは和歌を詠みます。武家も和歌を詠むのですが、貴族の方がお家芸として和歌を詠みます。そうすると東海道の途中で和歌が詠まれ、海道記が記されることが多くなりました。海道記からも東海道の宿場や名所が多少垣間見えてくることとなります。

また、箱根峠を越えるルートと深く関わることで、箱根権現と伊豆山権現の二所詣があります。鎌倉幕府にとって二所詣は重要な神仏なので、將軍家は行事として二所詣をよく行います。すると当然のことながら箱

根の峠が整備されていきます。將軍家が鎌倉から箱根権現に行くだけで、鎌倉中の御家人の多くが付き従い、威儀を正して行列を仕立てます。こうして街道は発展していくことになるのです。

小田原から鎌倉まで直線にするとだいたい三六キロメートルぐらいです。街道を歩くと、ほぼ四〇キロメートルでしょう。近世まで旅人が一日に歩く距離は、約四〇キロメートルでした。早朝に起きて四〇キロメートル歩いて宿場に泊まります。そう考えると鎌倉から一泊する場所がちょうど小田原地域です。そういう意味でも小田原というのは鎌倉後期になると非常に発展するわけです。

酒匂は足柄峠からでも箱根峠からでも合流地点に当たります。よって、鎌倉時代においては酒匂というのは幕府の中で重要視されていたようです。酒匂郷というところが鎌倉幕府の將軍家が泊まる御所があった場所です。浜辺御所というのがありました。次に、『吾妻鑑』建久三年(一九二)八月九日条を次に示します。

九日己酉、天晴風靜、早旦以後、御台所御産氣、御加持宮法眼、驗者義慶坊・大学房等、鶴岡・相模國神社仏寺奉神馬、被修誦經、所

謂、

- 福田寺酒匂 平等寺豊田
- 範隆寺平塚 宗元寺三浦
- 常蘇寺城所 王福寺坂本
- 新樂寺小磯 高麗寺大磯
- 国分寺一宮下 弥勒寺波多野
- 五大堂八幡号大会御堂 寺務寺
- 観音寺金目 大山寺
- 靈山寺日向 大箱根
- 惣社柳田 一宮佐河大明神
- 二宮河勾大明神 三宮冠大明神
- 四宮前取大明神 八幡宮
- 天満宮 五頭宮
- 黒部宮平塚 賀茂柳下
- 新日吉柳田
- 先鶴岡神馬二疋上下、千葉平次兵衛尉・三浦太郎等相具之、其外神社、在所地頭請取之、景季・義村等為奉行、巳剋、男子御産也、(後略)

ここで記されている「御台所」とは北条政子のことです。北条政子が妊娠して産気づいたとき、安産で無事に男の子を生んで欲しいと、頼朝も思っていたことでしょう。何をするかといえは、神社もしくは仏閣に加持祈禱を依頼しました。ここで見ると、鶴岡八幡宮を筆頭に相模国の神社仏寺に神馬を奉ったとあります。例えば酒匂の福田寺、二宮河勾大明神などとあります。相模国に国規模で祈禱を依頼する際、小田原地域を含む西湘エリ

アに神社、寺が多かったことが分かります。

実際に産気づいてくると、弓を鳴らし、経を読みながら土器(かわらけ)をバンバン割っています。各寺、各神社で加持祈禱がなされます。こうした中で「巳剋男子御産也」とあり、無事に赤ちゃんが生まれたわけです。

小田原宿の成立

国府津という国府・津と書いていますので、国府があったと思われるのですが、中世のころは国府津と書いていません。地名が記された史料を見ますと、多くは「粉水」と書いて「こづ」と読まれていたようです。国府津も東海道の宿場です。

松田・曾我・田島方面から南に延びる道が東海道と合流する地点にあります。そのため国府津は交通の要衝として重要視されていました。鎌倉時代の国府津宿の中心は国府津の二丁目、三丁目、現在鰻屋さんがあるあたりといわれています。酒匂宿は將軍家が泊まる御所がありましたが、国府津宿に関していうとその点は不明です。

小田原宿も將軍家が泊まったという史料はありません。將軍家が泊まるというより、国府津宿と小田原宿は民間の物流の中

で発展していった宿場町だと考えるべきであろうといわれています。

鎌倉・室町時代を通じて小田原地域の酒匂宿・国府津宿・小田原宿は、西から鎌倉に向かう旅人がこら辺りでだいたい一泊する距離的な交通の要衝として栄えて、非常に重要視されたということになります。先ほど酒匂宿は將軍家が泊まる場所、御所があったという話をしましたが、南北朝時代になると鎌倉に將軍家はいなくなります。室町幕府は京都に行きます。すると酒匂宿は衰退してあまり重要視されなくなり、国府津宿と小田原宿が史料によく登場することになっていきます。

箱根足柄ラインの重要性

前に「中国と遠国との境」という話をしましたが、箱根・足柄ラインは更に坂東との境です。今回改めて『小田原市史』の史料編をめくり直してみました。市史には箱根・足柄が境であることを想起させる記述がいくつもあります。

『吾妻鏡』元暦二年(文治元年・一一八五)六月九日条に、「廷尉此間逗留酒匂辺、今日相具前内府帰洛」(廷尉が酒匂のあたりで逗留していた。今日前内府を相具して帰洛した)と書かれています。

す。ここでの廷尉というのは源義経のことです。前内府というのは平宗盛のことです。治承寿永の乱が平定された後、実際に宗盛達は一度鎌倉の方に連れて行かれますが、酒匂に留め置かれていきます。

もう一つ、これは本誌二四八号に書かせてもらいましたが、元弘の変の時に平成輔が早川で留め置かれて殺害されたということがあります。

個人的には、なんでわざわざ鎌倉に連れて来るのに、早川で処分するのか。鎌倉で処分せよといのちで思っただけですけども、鎌倉ではなくて早川でしているという事になにかしら意味があるのではないかと。要は鎌倉幕府にとつて、箱根から早川・国府津付近というのは重要な防御拠点になるんですが、エリアとしては、実際に自分たちが支配する境界ラインとして明確に認識されていたと思うのです。なので、実際に幕府のエリアの所に入ってきた段階で処分する、もしくは処分しないで送り返すというのを、そこでしているのではないかと思えます。

ちよつと余談になりますが、卒業論文の時に読んでいたのが『花園天皇宸記』という後醍醐天皇の前代の花園天皇の日記でした。食事を忘れ、漫画より愉

しく読んでおりました。二四八号の原稿のお話があった時に、小田原の歴史でどんなことを書こうかと思案した際、『花園天皇宸記』に登場していた平成輔が、たしか小田原で死んでいたなと思ひ出し、改めて調べ直して書いたのが、その小論になります。学部生の頃に気づけなかったことを十五年ぶりに気づくことができました。

さて、本題に戻ります。『吾妻鏡』承久三年(一二二二)七月十八日条に「甲斐宰相中将範茂」と出てきます。これは承久の乱の時に後鳥羽上皇に与していた高倉(藤原)範茂(たかくらのりしげ)という人物です。「於足柄山之麓、沈于早河底、」(足柄山の麓に於いて早河の底に沈めた)とあります。ただ、足柄山の麓と書いてるので、単純に足柄の下流域にある小田原の早川と考えるべきか、足柄の方の川とするかというのはいかかきかきといけません。同じ事件を扱った慈光寺本『承久記』では「甲斐宰相中将ヲバ、早キ河ニテフシ付ニシ奉る」と書いてあり、「早キ河」ということで非常に流れが早いというので、早河という名がついているので、河川の地名比定というのはまだまだしていかないといけません。ただ、いずれにしても鎌倉幕府としては、

箱根足柄ラインの内側、もしくはその付近が、自分たちのエリアに入る、入らないかの境界と考えていたのではないでしょう。

更にいうと、関八州というときに、駿河国は含まれていません。室町時代には、駿河国は京都の幕府の指示を受ける今川氏がいました。鎌倉幕府においてもこの箱根・足柄ラインは非常に重要視されていたのではないかと思いうわけですね。

#### 足利尊氏、八幡山付近に野宿

「足利尊氏関東下向宿次注文」という史料があります。その中に小田原が登場します。足利尊氏が「小田原上山野宿」と書いてあります。この上山野宿とはどこか。恐らく現在の八幡山周辺で古い廓の跡が残されているあたりと推定されています。足利尊氏は室町幕府を興してから、南朝勢力や、弟の直義派と多くの合戦をしていきます。その中で、箱根を越えて小田原の上の山に宿したのは、まさに鎌倉に入る手前に一泊出来る場所ということになるわけですね。ただ、宿場そのものに泊まっていけません。鎌倉・室町時代の小田原宿は、現在の本町周辺が当時の宿場の中心となります。尊氏一行は小田原の上にある山

を宿として泊まっているとあります。それを考えると、宿場としては先程来酒匂に將軍の御所があり、国府津と小田原のほうは民間のほうで発展したといいましたが、要は軍勢が泊まるには場所がないといけません。宿場のところで兵たちが泊まれそうもないので上に野営していたのではないのでしょうか。

しかし、食料は確保しないと基本的には現地調達です。現地調達をする際、ある程度兵糧が集められないと困るわけですね。そのため宿場というのは非常に重要な場所です。兵が野営できる場所、將軍が泊まること出来る場所、寺院の御堂などがある場所と考えると、宿場周辺とセレクトするのが妥当だと思っております。小田原宿の少し上の山のところで、防御しやすい場所に宿泊したのではないかと考えられます。

(後半(次号)につづく)

(平成二十九年五月六日 UMEDCOにて) (聞き書き・山口隆夫、編集・荒河純)



## 透谷をさぐる

岸達志

小田原で誰でも知っている昔の人はだれだろうか。北条早雲は別格として、閑院宮とか山縣有朋、益田孝といった名前はかなり知られていると思うが、高齢化社会が進むと、だんだん少なくなってしまうのである。

ただ、二宮尊徳の名はおそらくみんな知っているだろうと思う。いまでも小田原駅の表口(二階)には尊徳の銅像が、西口には早雲の銅像が出迎えている。

ところで、北村透谷、福田正夫の名前は文学青年に知られるだけであろう。

透谷は明治二十七年(一八九四)五月十六日に二十六歳で亡くなった天才的な詩人であった。菩提寺の高長寺を会場にして、有志により今年も二十四回目の透谷祭が行われた。

来年は透谷生誕百五十年になるというのに、毎年記念行事が行われているのは、二宮尊徳と北村透谷の二人だけである。この二人に共通しているのは、生前より死後、全国的に名声が高い点であり、前者は現実的に活躍し、後者は文学的に活躍した。

ところで、透谷に「二宮尊徳翁」という一文がある。明治十四年(一八九一)十一月『女学雑誌』二九三号に掲載されたもので、「尊徳翁は余が郷里の人なり」で始まり、野州で翁に従った小山春山という人から話をきいたという。

「余が郷、翁を知る者甚だ稀」とい、「翁は稀代の理財家にして而して独特の大信仰を有し、天来の心内生(インナーライフ)によりて終生を犠牲的に職事し了りたる人傑なり……今日の政界に小名譽を弄し……猪鼠(カッソ)の徒須らく慚死(サンシ)す可し」と当時の世相を批判し、口を極めて翁を賞賛している。

この一文に勝本清一郎は『透谷全集』の解題で、透谷の愛郷心と青年期の自由民権運動の余熱が伺えるとし、さらに「すでにフレンド(キリスト教の一派クエーカーのこと)思想の反映がある」と指摘している。

僅か三頁に満たない小文ながら、もうひとつ私は詩人透谷の清純な性情がにじみ出ているのを感じる。

尊徳は後年、大日本報徳社の運動によって全国津々浦々まで知名の士となったが、その先駆をなしたのは意外にも透谷であ

った。大正期になって詩人福田正夫が若い教員時代から二宮尊徳を口にしたのは、教え子たちの口伝で伝わっている。福田が主宰した雑誌『民衆』第五号(大正七年(一九一八)五月十六日の命日に発行)は、透谷特集号を出している。

この先人と後進の二詩人は、詩魂とともに社会に対する熱情も共有していた。福田は昭和になつて尊徳について数冊の著作もある。尊徳の名は郷土の地上には報徳社によって輝き、地下では詩人たちによってながれているといつてよいであろう。

それについても、透谷は現代の郷里小田原にあまり馴染みのないのが残念である。

その理由はいくつかあるだろうが、第一に文章・文字が難しく、今の読者には読みこなせないことである。第二には現代語訳がないことであり、第三にはその思想や信仰がつかみにくいことである。

それにもかかわらず、愛読者、研究者によって次々に論文が発表され、毎年新刊の図書が出版されているのは驚くほどである。つまり、近代・現代の社会、文学を究めようとする有識者や学者にとつて、透谷は避けて通れぬ出発点であり基盤なのである。

期しくも明治新国家誕生の年に生まれ、新国家が清国と開戦する年まで生きたということになる。小田原の小学校入学が明治八年で泰明小学校卒業が明治十五年だから、まさに近代社会人としての教育を受けたわけであつた。といつても、江戸が東京となり、將軍様が天子様と変わつても、一般市民の頭の中まで変わったわけではない。

その中であつて早く智識を世界に求め、近代意識、近代思想を自覚し、はじめ自由民権運動に身を投じたが挫折、文学を持つて立つに決した。その出発点は「楚囚の詩」や「蓬萊曲」、次いで評論等となり、ついに全集三巻となつた。要するに、透谷という人は、詩人・評論家でありながら近代日本を剣に代つてペンで以つて幕開けした人であつた。

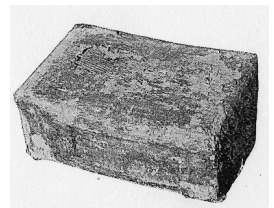
数年先が見える人は現世で名を成すが、百年先が見える人は薄幸である。盟友藤村は近代詩に於いても自然主義小説に於いても、透谷の行方を開華結実した人だといえよう。透谷もつて冥すべきである。



富士フィルム草創記(一)

## 森田茂吉の決断

荒河 純



はじめに

小田原史談の編集方針として、今後、旧市内だけではなく周辺地域にもスポットを当てていこうということ、平成二十五年の中村原から始まり、今年には井細田、多古地区を取り上げることになった。

検討メンバーが集まり、検討対象を列挙していく中で、古くから現在まで操業している工場として、富士フィルム小田原工場(現・神奈川工場小田原サイト)が一つの候補に挙げられた。

一つの工場の歴史を書くためには先ずその企業全体の歴史を

知る必要がある。

そこで、社史資料や富士フィルム草創期の関係者の書かれたものを読み進める中で、なぜ富士フィルムはこの西湘地区での創業に至ったのか、その真の理由について誰も言及していないことに気付いた。私自身もかつて「きれいな水が豊富な足柄の地」という説明を聞かされたが、よく考えてみると、そんな場所は日本全国探せばいくらかでもある。

そして、単純に小田原工場の歴史を取り上げるだけでなく、この小田原、西湘地区で産声をあげた頃の富士フィルムという一企業とそれを担った人達について書いてみたいと思うようになったのである。

富士フィルムの社員であれば親会社が大日本セルロイド(現在の株式会社ダイセル)であることは知っている。しかし、大日本セルロイドという会社の成り立ちも、その創業者である森田茂吉と

52歳の森田茂吉(大正5年)  
(文献(1)より引用)

富士フィルムの社員であれば親会社が大日本セルロイド(現在の株式会社ダイセル)であることは知っている。しかし、大日本セルロイドという会社の成り立ちも、その創業者である森田茂吉と

いう人物についてもほとんど知られていない。そして、富士フィルム創業時の大日本セルロイド会長であった森田茂吉が、実は富士フィルムの真の生みの親であることを知ったのである。

そこで本稿第一章では、この大日本セルロイドの創業者で、さらに実質的な富士フィルムの創業者でもある森田茂吉という人物に焦点を当ててみたい。

### 十七歳で家出

森田茂吉は慶応元年(一八六五)森田清八の二男として淡路島で生まれた。茂吉の生家は三六〇年続く大津屋という廻船業を営む旧家であった。しかし、両親は茂吉が幼いときに亡くなり、十二歳上の兄の世話になっていたが、茂吉十五歳のときに兄は米相場で失敗して家産を失ってしまった。勉強のできた茂吉は近所の漢方医松島俊三の書生にしてみらい、そこで医学の道を目指すことになった。松島医師は茂吉の人物と才能を見込んで、婿にならないかともらした。しかし、生涯を田舎の医師で終わることに耐えられないと思った茂吉は出奔を決意する。小さな柳(こうり)一つで、神戸に出て船で横浜に向かった。明治十四年(一八八二)、数えて十七歳の茂吉であった。

東京に出てきた茂吉は、兄の福

二郎の世話により、不義理をした松島医師の許しを得た。さらに淡路の富豪富本林三郎からの資金提供を受けるよう話をつけてくれた。こうして茂吉は医師を目指しドイツ学校に通い始めた。

そして、翌明治十五年秋には東京帝大予備門に合格、順調に医師に向けての勉学を開始した。しかし、翌十六年に入ると富本林三郎が事業に失敗して状況が一変する。国元からの援助が途絶え、勉学は困窮を極めた。制服を買う金も無く、ヨレヨレの伊予絁と小学校時代から履き古した袴姿で通学していた。それでもどうにもならなくなり、遂に明治十九年春に学を廃して横浜の貿易商會に勤めることを決意した。

ところが、茂吉の廃学を聞いて驚いたプチールという教授が、「君ほどの学生が途中で学業を止めるのはいかにも残念」と言って、在留ドイツ人へ日本語を教える家庭教師の仕事を世話してくれた。

プチール教授の世話で廃学という事態は脱した茂吉であったが、専攻科に進むに当たり大きな方向転換をしたのである。もともと茂吉の東都遊学の目的は医学の習得にあつたはずだが、学業が進むに従い、自分の能力は医科より別な方に向いているのではないかと思いはじめていた。そして、



いよいよ本科に進むにあたり、新たに開設される独法律科に進むことを希望したのである。幸いプチール教授はじめ周囲の理解も得られ、茂吉は法律科に進んだ。

大学本科では高価な専門書も必要になりアルバイトではまかないきれず、どうしても郷里からの仕送りが必要であった。郷里の実家親戚含めて仕送りする余裕は全く無かったが、実家親戚は家財を売ってでも茂吉を支える覚悟を決めた。それでも実際には仕送りは滞りがちで、茂吉はそれに對して不満を洩らしたことで兄の福二郎を怒らせ、仲違いもしたが、何とか明治二十三年(一八九〇)七月十日、東京帝大を無事に卒業したのである。

直ちに内務省試補として採用され、年俸五百円を下賜されることになった。それまで月十円の仕送りで生活していた身分からすると雲泥の差である。淡路を出てから九年目、茂吉数えて二十六歳のときであった。

清原奎吾との出会い

卒業の数ヶ月前、教授の紹介で清浦奎吾(のちの総理大臣・伯爵)を訪ねたことがその後の茂吉の進路を大きく左右することとなったのである。

警保局長を辞任して貴族院議員になったばかりの清浦奎吾

の、外遊の随行員として茂吉が大抜擢されたのである。内務省試補としてスタートしてからわずか半年後のことであった。

明治二十四年(一八九二)四月から翌年の三月までの間欧州各地を歴訪した。若い茂吉にとつて見聞が広がったことはもちろんであるが、この在欧約一年の間、茂吉はずつと清浦と行動を共にし、お互いの人柄を知り尽くすことで堅い信頼関係が出来上がった。この信頼関係は一生続くのである。

帰国すると茂吉は内務省大臣官房文書課勤務を命ぜられ、栃木県参事官に任じられて宇都宮で知事のブレンとして働いた。

しかし翌年には警視庁警視を拝命し、警視総監官房第三部長となり帝都の治安行政に専念した。当時の警視庁は薩摩出身者で固められており、そこに新風を吹き込む役割を担っていたのである。茂吉は警視庁の綱紀粛正に取り組み、飲食店からの盆暮れの付け届けを禁止するなど大鉦を振った。これには摩擦も生じ、「保護色というものを知っているか。少し考えてみたらどうか」との忠告を受けたが、「保護色の意味は知っていますが、わたしは森田色で行きます。」と応えたという。

明治二十六年(一八九三)九月、清浦夫妻の媒酌で山崎直胤(三重

県知事、山梨県知事、宮内庁調度局長)の長女・茂登子(もと)と結婚した。翌年には長男茂雄(のちの富士フィルム専務取締役)が生まれていく。

明治二十九年(一八九六)三月には栃木県書記官に任ぜられ、二度目の宇都宮勤務となった。宇都宮ではトラブルの解決に手腕を発揮し、特に芸者との揉め事の多かつた平岡定太郎(三島由紀夫の祖父、のちの樺太庁長官)の夫人からずいぶん頼りにされたという。

翌年には淡路の旧藩主でもある蜂須賀茂韶文部大臣から文部大臣秘書官就任を要請される。文部行政に「異分子」(他方面からの圧力)を入れさせないという方針で臨んだ。間もなく大臣官房会計課長を兼務して学校予算編成で多忙を極めた。その年の十一月には蜂須賀大臣が辞任したため茂吉も直ちに辞表を提出した。

諭旨退職した茂吉は衆議院議員への立候補を取り沙汰されていたが、選挙前の明治三十一年(一八九八)二月、再び内務省に登用され内務大臣秘書官となったことで、国政出馬の線は消えた。

十月には内務書記官兼内務省参事官台湾局長に

昇進し、さらに台湾総督府事務官も兼任することとなった。この頃の台湾総督は児玉源太郎であり、その下で後藤新平(のちの内務大臣、東京市長)、益田孝(三井物産創立者)らと台湾銀行を創立した。ここで益田孝と知り合ったことが、小田原との縁の始まりでもあった。

明治三十五年(一九〇二)十月、茂吉は内務省衛生局長に任ぜられた。衛生局長は従来医者が務めていたが、法律改正で文官が任じられるようになり、その第一号に茂吉が選ばれたのである。元々医者を目指していたキャリアに加え、臨時検疫局事務官を兼務した経験、明治三十二年には花柳病(性



小田原十字町森田邸にて(大正14年)  
左より茂吉、室田義文、清浦奎吾伯、野崎広太、清浦夫人、茂登子、律子(長男嫁)、友子(三女) (文献(1)より引用)

病) 予防万国会議に政府委員として出席し、わが国の公娼制度の状況について講演し反響を呼んだことも大きなポイントになった。

しかし、衛生局長の任は一年足らずで終わる。農商務大臣に就任した清浦奎吾が内務大臣児玉源太郎に懇願して茂吉を引き抜き、農商務省商工局長に据えたからである。児玉は、「清浦はお前に惚れとるぞ。行つてやれ」と快く送り出したそうである。

時はまさしく日露戦争前夜、戦争中の商工行政は軍が必要とする物資をいかに早く製造して届けるかという点が最優先される。明治三十七年(一九〇四)二月に始まった日露戦争では茂吉の手腕が遺憾なく発揮された。この功で明治三十九年(一九〇六)には勲章と金千五百円が授与された。

戦後は、清韓両国への経済進出援助、工業試験所や工業学校設置、気化器工業化推進、商工業組織の刷新など、在任期間四年四ヶ月の間に、清浦大臣のバックアップもあって多く且つ幅広い成果を挙げた。ところが、次官就任直前といわれていた明治四十年(一九〇七)十二月、茂吉は突然官途を辞し野に下ったのである。

#### 野に下った若き俊英官僚

明治二十三年七月から明治四十年十二月まで十七年余の官僚

生活で、茂吉は多くの貴重な経験とそれ以上に日本を実質的に動かしている人物達と親しく知り合うことができた。

森田茂吉は、大局を見る眼と判断の確かさに加え、実行力と指導力も群を抜いていた。茂吉が手がけたものはほぼ全てが成功を収めたので、官界ではこの若き俊英に期待するところ大であった。一方、因習や情実を排して真によしと判断するものを断固として押し進めるといふやり方を貫いた。また、誰に対しても自分の所信をつねに直截披露し、持つて回った言い方や根回し工作は一切行わなかった。そのため、内外で摩擦や衝突を生むことがあったが、いつも誰かが茂吉に手を差しのべ窮地を救ってくれた。それは茂吉の生来持つている清廉潔白な性格によるところが大きい。

明治三十九年(一九〇六)一月、清浦が農商務大臣を退任し、替わって松岡康毅(やすこわ)が就任したが、松岡は全く頼りにならない大臣だった。後の日記で「松岡康毅はあまりに無能にて」と書いたほどである。ただ、原敬日記では「農商務省の如きは次官以下属僚皆清浦派にて松岡は何事も為し得ず」と同情的に書かれている。立場が違えば見方は変わるものである。

いずれにしても、松岡の下では

何も出来ないという焦燥感に駆られた茂吉であったが、たとえ松岡が早晚離任するにしても、その後も信頼しがたい大臣の就任も当然のようにあり得る。その場合、果たして自分は耐えていけるのだろうか? と自問し、もはや官界に住むべきで無いという結論に達したのである。多くの同僚、知人にはその短気を諫められたが、清浦だけは茂吉の話を聴いて翻意を求めなかった。

こうして、茂吉は野に下った。当分は休養のつもりだったが、四十三歳の有能な人材を世間は放っておくわけがない。三井合名会社の依頼で、明治四十一年(一九〇八)七月、絹絲紡績株式会社の専務取締役に就任し京都に転居、間もなく社長に就任した。

当時紡績事業は、絹絲、鐘ヶ淵、富士の三社が激しく競争しながらイタリヤの会社に対抗できずに共倒れの危機にあった。これを統合して無益な競争から解放するというのが三井と茂吉の主張であった。富士紡績はこの合同に参加できなかったが、絹絲紡績と鐘ヶ淵紡績の統合を進め、明治四十四年(一九一)三月に実現を見た。ところが、その直後に自社の工場から不良資産が見つかった。合併への影響は無かったが、茂吉はこの責任を取って新会社の役員就任を辞退している。

明治四十四年(一九一)には、上海製造絹絲株式会社の取締役に、中外商業新報社(現・日本経済新聞)の監査役に就任している。後者では、社長の野崎広太を事業の上で助けるとともに、野崎と私的にも親しい関わりを続けた。後に小田原に住居を移すのも野崎広太(幻庵)との親交によるところが大きい。

#### 大日本セルロイド創設

絹絲紡績社長辞任後、東京へ戻った茂吉にまた三井からの要請が届いた。明治四十五年(一九一)一月のことである。三井が創設した堺セルロイドを視察して欲しいという。堺セルロイドは外国人技師を迎え事業開始後一年を過ぎても未だ製品を出せず、赤字に悩んでいるとのこと。工場をつぶさに視た茂吉は早速事業改革に関する意見書を提出した。三井では茂吉に専務取締役に就任してもらい事業一切を委ねると言うてきたのである。

明治四十五年五月、堺セルロイドの経営を見るようになると、先ず大幅な人員削減、経費節減から手を付けた。高給な外国人技師を解雇して国内の技術者だけで問題の究明を行うよう指示、高給事務職も全て解雇して若手登用に踏み切った。こうして、国内技術者や若手の奮起を促すことで、生





小田原十字町の森田茂吉別邸

(文献(4)より引用)

産技術が確立し、製品が世に送られるようになったのである。この時の、事務部門の中心にあったのが、後に富士フィルムの初代社長に指名する浅野修一であった。

その後、第一次世界大戦での需要拡大もあって会社は順調に成長した。しかし、大戦後の不況に突入すると、堺セルロイドとはほぼ同じ時期かその後雨後の筍の如く出来たセルロイド会社の過当競争によって、急激に業績は悪化していった。

そこで、堺セルロイド(三井系)、日本セルロイド人造絹絲工業(鈴木商店・三菱系)、大阪繊維工業(岩井系)、三国セルロイド、能登屋セルロイド、十河セルロイド、東洋セルロイド、東京セルロイドの八社の合同を目指して茂吉は活発に動き始めた。資本系統も異な

り、それぞれに複雑な事情を抱えていたが、茂吉の私利私欲の無い情熱を傾けた活動と、各社首脳の大局に立った判断、および原料である樟脳の供給元である台湾総督専売局長賀来佐賀太郎の斡旋によってついに大合同合併が成立したのである。

新会社大日本セルロイド株式会社創立総会が、大正八年(一九一九)九月に行われ、茂吉は初代の社長に就任した。その後、茂吉は社長として十三年、会長として九年、合わせて二十二年間同社の経営に当たった。その後も相談役、顧問として昭和二十四年(一九四九)まで関与し続けたのである。

鈍翁と幻庵に導かれて小田原へ  
大日本セルロイド創設後間もない、大正九年(一九二〇)九月、茂吉は小田原十字町に五百三十坪の土地を購入、家を建てた。病後の軀を小田原で養っていた長男茂雄を見舞う度に、友人の野崎広太(幻庵)や益田孝(鈍翁)から、「小田原は季候が温和で老後の身を寄せるのに絶好の地であるから、ぜひ転住してくるよう」と強く勧められていたからである。

この頃の小田原は別荘地として有名だったことは間違いないが、現代から見るとやや不思議な感じがする。なぜ小田原なのだと

う? おそらく、小田原の海を好んだ伊藤博文が明治二十三年(一八九〇)滄浪閣を建て、皇族や政財界人を招いたのがきっかけであろう。その後、明治三十四年(一九〇一)に小田原城二の丸が御用邸として使われるようになり、保養地として全国的にも認知されるようになった。明治三十七年発行の小田原全図の解説文(当時の観光案内)には次のような魅力的な言葉が並んでいる。

東京

夏期最高九十八度(三十七度)  
冬季最低 十六度(零下九度)  
高低の差八十二度(四十六度)  
小田原

夏期九十度以上ること殆どなし  
冬季三十度を下ることなし  
高低の差六十度(三十三度)  
年平均は何れも五十六、七度(十三、四度)の間にあれど、夏暑からず冬寒からぬが希望の温度なるべし。小田原はこの願いにかなう。雨は八月を除けば春夏秋に潤沢にして、冬三月極少量なれば雪はなお稀なり。又夏は涼しき東南の海風吹き、冬は西風多けれども、海軟風と陸軟風とは四時(春夏秋冬)気温を和らぐ。随って別荘地として最も適し、海岸一帯及び十字町の地、冬季霜を見ざるを以て、なお佳なりとす。

その結果、明治三十九年(一九〇六)には益田孝の「掃雲台」、

翌明治四十年には山縣有朋の「古稀庵」が建設され大別邸ブームとなるのである。森田の恩師である清浦奎吾も、農商務大臣を辞した直後の明治四十年に山縣の古稀庵の隣りに別邸「皆春荘」を建てている。

森田が小田原に来た大正九年は、別邸ブームは未だ衰えるどころか、先に移ってきた数寄者のサロンが出来上がっていたと思われるのである。

森田茂吉邸の庭は野崎幻庵と益田鈍翁の進言に従って箕面の滝を模した純日本風、蔵は大谷石を使って三階建てとし、海が眺められるようにと屋上に望楼を作った。国道に近いにもかかわらず閑静で空気も澄明なので「樓心堂」と名付け、仕事に閑があるときにはここにきて暮らすつもりであった。ところが、残念なことにこの小田原最初の別邸は関東大震災で全壊した。幸い家族は全員無事であったが、今度は専門家の意見を聴いて耐震建築とした。

茂吉が本格的に住所を小田原に移したのは昭和八年(一九三三)九月である。富士写真フィルムの創立関連で小田原での仕事が増えてきたからでもあろう。そして翌年には、誕生した富士写真フィルムの相談役に就いた。茂吉七十歳である。

茂吉が小田原に居を移して最



も親しく関わったのが、やはり野崎幻庵と益田鈍翁である。事業の上でもかつて関わりがあった二人であったが、人間的に通じ合うものがあつたのだろう。益田には長男茂雄の嫁を、野崎には三女友子の婿を世話してもらつた。茂吉が庭を造るといふと、二人は足繁くやってきていろいろ意見を述べた。茂吉自身は茶の湯に造詣は無かつたが、庭に茶室を造つたのも二人との親交ゆえであつたのだろう。



小田原・益田孝邸での「フィルム事業説明会」

(昭和7年) (文献(1)より引用)

会長)、松永安左工門(電力中央研究所理事)、塩谷温(漢学者、東大名譽教授)、小熊棹(遺伝学研究所長、北大名譽教授)、長谷川如是閑(評論家)、青木得三(大蔵省主税局長、中央大学教授)などと交流があつた。

### 写真フィルムの国産化

写真感光材料の製造試作は、明治十六年(一八八三)深沢要橋、同十七年に松崎晋二、吉田勝之助という人が乾板製造といふかたちで行っている。製品としては、明治二十二年(一八八九)に築地乾板製造会社で作られた「東京乾板」と名付けられたものが最初であるが、かなり怪しげなものであつたため直ぐに潰れてしまふ。

その後、明治三十九年(一九〇六)に日本乾板株式会社が設立されるがこれも間もなく解散してしまふ。この間、明治三十六年(一九〇三)には六桜社がわが国初の印画紙の製造に成功した。しかし、撮影材料である乾板の製造は難しく、大正九年(一九二〇)に東洋乾板株式会社が発売した「S T 乾板」が最初である。これとて、乾板でありフィルムではないのである。欧米では既に一八八八年にはロールフィルムが発明されているので、この時点でも実に三十年以上の遅れであつた。

森田茂吉は、大日本セルロイドを発足させた大正八年頃には写真フィルムの製造を企図し、先ずフィルムベースの研究を始めようと決意した。ちょうどこの頃からわが国でも写真趣味が普及し始め、また映画も大衆娯楽の王座になるという展望が見え始めたからである。将来わが国にはフィルムの大需要期が必ずやつて来るといふ事業家の慧眼であつた。

一口にフィルムベースの製造といっても大変なことであつた。原料はセルロイドを使うわけであるが、均一な薄いフィルムにする製造技術開発に加えて、当時のセルロイドは文具、玩具、家庭用品には十分な品質であつたが、フィルムベースにするには不足であり、この品質をどう向上させるかが大きな課題であつた。

大正十二年(一九二三)京都帝大工業化学科を出て大日本セルロイドに入社した春木栄は、入社四年目から本格的な写真フィルムの研究に入った。春木はこの頃の様子を振り返って次のように記している。

昭和二年五月私は大日本セルロイド株式会社東京工場の一隔(角)に、フィルム試験所設立の命を受けました。当時大日本セルロイド会社は、セルロイド企業としては世界一の規模であつたのですが、写真フィルム用のセルロイド生

地は出来ておりませんでした。会社ではこの写真用生地を国産化し、原料からの一貫した写真工業確立の計画があり、第一次世界大戦から調査研究が行われていたのでありますが、第二段階として昭和二年東洋乾板に出資し、作間政介氏が専務として就任、継いでフィルム試験所では昭和三年より工業化設備まで試験研究が開始せられました。その後昭和六年当時の商工省に於かれては、染料、曹達灰、ボールペアーリングに次(い)で、映画用フィルムの国産化に対して助成金を下附する企画がなされました。フィルム試験



昭和6年発売の「大日本フィルム」(文献(2)より引用)

所の研究はなお未完成なのでありましたが、国産化の至難な映画フィルム（フィルム）の製造には、国の助成なくしては企業が確立し得ない状況にあったため、この期を逸してはといそぎ企業化にすむ事になったのであります。

ちなみにこの間、国産ロールフィルムとしては、昭和三年（一九二八）、旭日写真工業が「菊フィルム」を、翌年に小西六本店が「さくらフィルム」を、昭和六年（一九三一）に大日本セルロイドが「大日本フィルム」を発売しているが、まだまだ輸入品には大きく及ばなかった。本格的な国産写真フィルムは、昭和十年代以降の技術進歩を待たなくてはならない。これは次回稿を改めることにする。

決断の人、森田茂吉

こうして見てくると、森田茂吉という人物は生涯を通じて決断の人であった。

まずは十七歳で家出同様に淡路から東京へ出てきたこと、東大の予科から本科へ移るときの医科から法科への進路変更、官僚のトップに登りつめる寸前で野に下ったこと、セルロイド八社を一つに合併したこと、写真フィルムの国産化を目指してフィルム試験所を創設したこと、そして富士写真フィルムを創立したことで

ある。

この決断を支えたのは、家族、恩師、友人、上司、部下など茂吉に関わる全ての人達であった。そして、それを可能にしたのは、茂吉自身の清廉な性格ゆえであったと思われる。（つづく）

\*本稿執筆にあたり、富士フィルムホールディングス総務部社史資料室の方々には大変お世話になりました。

（参考文献）

- （1）森田茂雄『非庵・森田茂吉』、（一九六四）
- （2）『創業二十五年の歩み』、富士写真フィルム（株）（一九六〇）
- （3）『富士フィルム五十年のあゆみ』、富士写真フィルム（株）（一九八四）
- （4）斎藤勝雄『庭のデザイン』、技報堂（一九六二）
- （5）福本邦雄『躍動する多角化への道―富士フィルム―』、フジインターナショナルコンサルティング、（一九六三）
- （6）春木栄「富士フィルム設立当時の思い出」、『足柄史談』第十二集、（一九七四）



「純国産写真フィルム発祥の地」の碑（東京都板橋区小豆沢）

「徒然なるままに」

―忘れられた地名（四）―  
「古新宿」・「新宿」

杉山 虔一

『新編相模国風土記稿（雄山閣版）』卷之二、足柄下郡小田原宿の「新宿」の項によれば「家數百二十四 東西二町二十六間、南北一町七間餘、古新宿の項は「家數百四十二 東西二町程南北二町餘」と記されています。国土地理院所蔵「明治十六年二月第二期測量 神奈川県相模国足柄下郡小田原宿（部分）【図A】」を御覧下さい。両町の様子を見ることが出来ます。

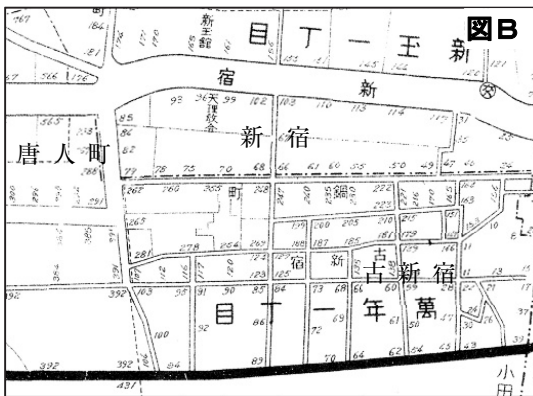
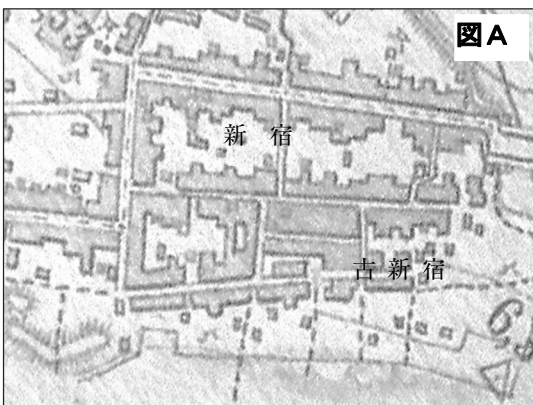
また「大正十二年 小田原市史 史料編 近代Ⅱ 付図（部分）【図B】」も掲載しましたので、

前々回の板倉本天保図と併せて比較して下さい。

一目瞭然ですが、江戸時代の新宿町の南側は国道一号线の拡張に伴い後退したため、半分以上消滅してしまっただと考えられます。

また、新宿町の隣り、唐人町も国道一号线の北側が後退して、スムーズな道路形体となつて、現在に至った事が分かります。

それに比べれば、古新宿は基本的に何も変わっていませんが、昭和二十六年十一月万年町大火の後、道路が拡幅整理されたり、西湘バイパス建設時に工事用道路を建設したため、細い道を除いて昔を偲ぶ道もほとんど無くなってしまったのではないでしようか。（終わり）



注：図A、Bとも原図に新宿、古新宿等の地名をゴシックで付記。



## 駅前旅館「重乃井」のこと

—女将の語る小田原駅前—

話し手 佐々木 初枝さん

「重乃井」

「重乃井(しげのい)」という名の由来ですか。お芝居に「重乃井子別れ」ってありましたね。でも、中村重吉(じゅうきち)さんという方が、昔ここで「重乃井」という旅館をやってたからじゃないですか。万年町の方で南米のブラジルのほうへ行かれて、そのあとが空いたから父(金治)が湯本の福住を勤めあげて旅館を買ったんですね。中村重吉さん、なんかそんなよ

うなで「重」を取ったんですね。父が旅館を始めたのは昭和二年(一九二七)です。うちの父は湯本の福住さんにちようど十年勤めてました。生まれたところは南足柄の狩野なんですけど、なにしろ兄弟が多くて、八人兄弟の次男でした。

狩野の石井与惣太さんでね、「勉強のできる子がいたら学校へやりたいからもらいたい」と、男の子さん二人くらいいらつしやるんだけど、うちの父は八人兄弟だからちっちゃい時にもらわれていった。あそこでおばあちゃんやなにかに仕込まれたんだから辛抱ができたんだって言ってましたよ。

隣の佐々木文房具屋の叔父(耕作さん)が生まれた翌年にお父さん(浅五郎)が亡くなって、うちの父は実家に帰ってきただんです。それから、今度は湯本の福住に勤めたんです。

の弟を引き取って、姉も早く不幸せ食ったからその子も一人引き取ってみていました。

父がここを買って、誰かお嫁さんがいないといけないからと、福住さんのほうに誰かお嫁さんになる人はいないかと・・・。

そしたらあの娘がいいんじゃないかと言われて、昭和二年に母(マサコ)と一緒になりました。

うちの母は広島県の呉生まれで、早く両親を亡くして苦労してました。母の兄が横浜に来ていて、母は横浜から湯本の福住さんに奉公したわけです。

報徳で積み立て

中村重吉さんがここを売ってブラジルのほうへ出かけて、銀行さんが持っていたらしいんです。父は何ヶ月か借りてたけど、それじゃあとというんで、勤めていたときに積み立てしたのと、うちの母が積み立てかなんかやってそれが貯まったのに、少し足りない分は福住さんでお借りしてね、それでここを買った。

そうしたら福住さん、「よくお前んとこはそうやってすぐお金が貯まったな」と言うから、「あれは二宮先生の関係だと、自分の買いたいものを全部我慢して、おばあちゃんがいたからおばあちゃんのものど商売に使うものは買ったけど、そうやって貯め

たんだよ」ってね。私は昭和七年(一九三二)生まれですけど、母がいろんな話をしてくれてました。母は私によく、「こんな親でも二親揃ってれば長者の暮らした」と言っていましたね。

「あなたのお母さんの子だよ」

あたしは生まれたときからこなんですよ。生まれたのは昭和七年二月六日です。八十五歳。

あたしは一人っ子で、昔は一人っ子っていうのはたいがい貰いっ子が多かったんです。だからあたしもね、ちよつとそんなことを親に言った。そうしたら、「みんなに聞いてみりゃいい。みんながあんたはあんたのお母さんの子だよって言うよ」って。

幼稚園は新玉幼稚園が出来て間がない頃でした。うちにおばあちゃんがいても、あたしは一人っ子でしょ。近所に友だちがいなくてもね。それで、うちの前の三河屋さんにあたしと同年の男の子がいて、その妹が二年下にいたもんで、三人であるって(歩いて)、銀座通り出て、高梨(洋品店)さんの横を出て、あの道を通って行きました。「自転車に気をつけな」って言ってね。二年通いました。クリスマスのおきにはお遊戯やったりね。神田さん(裁縫女学校)とか鶴井さん(材木店)、「油統」の湯川さ





んが一緒でしたね。まだ幼稚園が珍しい時代だった。同じ敷地に教会があつて、「わがままをすてて・・・」って歌つてましたよ。

宇佐美ミサ子先生はあたしより一つ上なんです。お父さんは丸通さんにお勤めしてらした。とても面倒見のいい人で、「ミサ子ちゃん」はっちゃんと呼びあつてました。ちっちゃい頃からよくうちにも遊び来てもらつて、よく一緒に遊びました。駅に抜ける道に双葉屋さんの倉庫があつて、あの頃はそんなに開けてないから、あの辺が子どもの遊び場だったんです。それから北条さんのお墓(氏政氏照の墓所)の近所ね。よく遊びましたよ。

### 「北条さん」

あそこ(氏政氏照の墓所)は子供たちの遊び場だね。あの近所の人は少しお参りしてたけど、「北条さん」があつても忘れられるようなかたちになっちゃいけないって言つて、伝心庵さんにこの近所の方とお話して、うちの父なんかも小林質屋さんだの、町内ちがつても向こうの人たちと相談して、ご供養してあげたのがいいだろうというのが始まりなんです。それは、ここが火事になつたのが女学校

卒業してつからで、昭和十八年(一九四三)後だね。

### 恩給局のお嬢さんたち

戦争って嫌な時代がありましたけど、でもね、ここは焼けないです。ちょうど八月十四日の晩に空襲があつて一丁田と青物町の方が気の毒でした。父は役をやつてましたから空襲があつてもここを離れることができない。「空襲！」って言うのと、あたしなんかは隣の叔母の家族と大稲荷さんの裏へ逃げて行つて「ああ、落ちたな」つて。

戦争中、うちは内閣恩給局の女子の宿舍だった。あのころ(昭和十九年一月)東京から内閣恩給局つてのが小田原に疎開してきたんです。みんないとこのお嬢さんたちで、挺身隊にとられるといけないというんで恩給局に入った。小田原の女学校と城内小学校に分かれて、その一部を借りてたんです。父が旅館組合の役やつてまして、みなさんうちに泊まった。十二、三人入つて、母がその賄いやつてました。そういうお姉さんたちがあつたしを可愛がつてくれた。終戦の翌年にすぐ旅館を再開して、恩給局のお姉さんたちが引き揚げてもお手紙くだすつたりね。

### 女学校で楮の皮むき

戦争中は学校が工場だったんです。あたしなんか一年に入つた十二月八日から終戦まで楮(こうぞ)の皮むきをやりましたよ。あれが大変だった。それでもみんなね、久原房之助さんという、それこそ大臣のお嬢さんもですよ。大磯にお住まいがあつてこつちへ通つてた。

火の気のない教室で、ゴザを敷いてそこに前掛けやつて、水に浸した楮を水で洗つて皮をむいて、校庭の簾で干して、乾燥させたのを小田原製紙の車、馬力ですよ。そこに持つて行つた。それが紙の原料で(風船)爆弾になるんですよ。今で考えるところは原子爆弾ですもの。手霜焼けが出来ようとなんだらうと、みんな一生懸命やりました。学校行つて勉強しないでそれを終戦の日までずーつとやりました。友だち同士は仲良かったですよ。

その頃、配給だからお金出してもお米を買えない。うちでは父が三竹山のほうに二反ぐらい畑を借りていてたから、休みの日はあそこへ行つて草むしりした。麦だとか陸稲とか世話のわからないものを作つていた。あたしはリヤカーの後ろに乗つて行つて、荷物の多いときは相模沼田で

降りてあそこの坂を三十分ぐらい上がつて行きました。そういう時代でね。

うちでは部屋は八つあつて、戦後になって奥のほうの土地が空いたもんで、あたしたちが結婚するころ二つ増やした。

### 「汽車通」したくない

戦争が終わつたのが女学校(小田原高女)二年です。進駐軍が酒匂に入つていて、土曜日になると小田原に出てくるというから、学校はお昼で帰つてくる。あたしは学校通うにも近いから「汽車通(学)」したくない。あの頃乗り物は混んだんです。貨車に乗せてもらつたりね。だもんでね、「あんなちはいいね、近くつて」つてね。あたしが一人っ子で育つたから、母は友達と仲良くしなけりやいけないと、だからうちに風呂敷と傘はたくさん用意してあつた。



女学校終わってすぐ、チンチン電車に乗って板橋の下河原のほうにお裁縫に二年ぐらい通ったりね。

うちの旅館を手伝っていたもんだから、あたしはお勤めしたことがないんです。

#### 夫は横浜の牛乳会社へ

うちの主人(康平)は昭和四年(一九二九)生まれで、田島からお婿さんに来たんです。うちに来たときは横浜の、昔は「保証牛乳」という牛乳屋さんだった。昔の牛乳会社で今のようない機械がないから、自分が工場長になるまでは冷たくても手で瓶を洗ったりね、そういう時代だった。牛乳会社は反町の先の松本町にあつて、あそここのほうまで毎日通ってたんですよ。あたしと結婚した頃でも、遅くなるで一時くらいになるときもあるんです。

旅館のほうは、隣りに叔母と同年の従姉妹がいましたからときどき手伝ってくれまして、その後は女中さんと子守のお姉ちゃんが来てくれました。

#### 大相撲、早慶戦大好き

旅館をやつてて印象に残ったことは、小田原でお相撲の巡業があつたりするとお相撲さんが泊まったことですね。うちは父

の時代からお相撲大好きです。

泊まったのは神風正一さんで、よくお話ししましたよ。あの人も阪神ファンでね。あたしがまだ女学校の頃です。力道山さんは当日来て、海のほうへ降りるところでうちから持つていったお昼を女中さんがお鉢からお給仕してみんなで食べる。あたしも行きましたよ。郵便局のこつちにお相撲がかつたことがありました。神風さんは自分がお相撲を辞めてもお弟子さんに番付送つてこらせた。

映画は復興館とか富貴座とかね。「愛染かつら」は好きで二回観ました。隣の同年の従姉妹とよく観に行きました。ふたりだと親は許してくれないんです。早慶戦があると、朝早い四時半くらいの電車に乗って東京へ行くんですよ。早稲田の蔭山さんが南海に入る前でした。女学校出た頃だから十八、九でしたね。あと、ラグビーも駅伝も大好きです。

#### 「父母の根元は・・・」

福住さんが報徳さんのおうちだから、うちの父も報徳やつてました。だからあたしの子供の頃には、二宮神社さんで常会があると父はよく出かけて行つてました。

うちの父は最後に二宮神社の

責任役員をやつてました。この

軸(「報徳訓」)は父が草山淳造さんに書いてもらったものです。つてのは、あたしなんか小学校のときは「父母の根元は天地命令に在り」つて、全部覚えさせられましたね。子どもの頃は、父がこれを掛けると、「人間はこれを守つていれば一番いいんだ」つてよく言われました。父は真面目を絵に描いたような人でしたからね。だから母が、「お父さんの顔に泥を塗るようなことだけはしてこないでよ」つてよく言つてました。

あの頃はこの辺でも結構、西島さん(松屋さん)でも先々代の方だの、銀座通りで江島屋さんの瀬戸物屋さん、もう一軒十字町の方だの、みんなあの頃、毎月のいくにちだかは二宮神社で常会があつてね。

うちの父は謡もやつてまして、東京から亀山先生がいらつしてつてね。流儀は観世流です。江島さんの昔の旦那さんの江島屋さんの弟さん、西島さん、結構やつてましたよ。

#### 「はつちゃんが倒れたら困る」

父が亡くなつたのは昭和四十七年(一九五二)です。六十五、六だつたかな。菩提寺は南足柄の金剛寺です。あちらが生まれ、たほうなもんでね。

母はもうちょっと早く、息

子が生まれた翌年に亡くなつた。旅館やつていたから、朝起きても母が、「オレが見えてやるから、身軽で洗濯しちまえ」と言つてくれたのが、母が亡くなつたら天国から地獄で、息子がちよるちよる起きてくる、上の娘が学校行くで、大変だった。だから今度は息子を背負つていると、お馴染みのお客さんだから、「はつちゃんが坊や負つて仕事してるとかええそうだと思うよ」今度ははつちゃんが倒れちゃつたら困るから」つて、ほんとにみんなに助けられてね。

#### 駅前の旅館と商店

私の子供の頃からここにあるのは、うちと床屋さん(天野さん)ですね。文房具屋は叔父が兵隊から帰つてきてうちに来て、進駐軍に何ヶ月か朝四時起きでここから通つて、それを元手で叔父が始めたんです。

小田原の駅前の旅館は、うちもあるし丸登(まると、現在は土産物屋さん)さんがあつて、松ヶ谷さんでおばあちゃんが松藤館という旅館をやつてました。今はなくなつちやつたけど登山デパートの向こう(職安通りに行く角)に田中屋さん、この並びには直ぐ松竹さんがあつたり、駅前ですから結構旅館がありま



したよ。父が最後頃に組合長をやってまして、駅前は駅前でないな仲良くってね。

うちは商人のお馴染みさんが多かったです。月に一回町の瀬戸物屋さんとか金物屋さん品物を卸したり商談に来たりしたときに泊まるんですね。戦後は富士フイルムやなにかに一週間ぐらいお仕事に来る人が泊まつたりね。

栄華軒さんは、あたしの子供の頃はイボラギンムさんっていう外国の人が洋服屋やっていたあの頃外国人がいるなんて珍しかった。仲良かったですよ。

錦月さんもあそこじゃ古いですよ。そばに土方さんという酒屋さんがあって、あそこも古かったですねえ。横浜銀行のここは何があったか・・・、あそこは組が違うんですよ。

床屋さんまでは三区だけけど、その先の飯田さんや寿さんは二区なんです。寿さん、はのやさん。あたしの子供の頃からね。はのやさんは足袋屋さんなんて言ってるね、昔あちらのおじいちゃん自分がうちの足袋を売ってたりして、それで足袋屋さんって言ってましたよ。

角の三角のところは日興証券があつたんですが、それ以前は小さいお店がたくさんあつたんですよ。渡辺さんの酒屋さんや

千草園さんのお花屋さんもありました。

あたしはここを離れたことがなくて、自分の土地というのはすごく愛着があるんですよ。

昭和五十八年「重乃井」閉館

父が旅館組合の組合長をやっていた頃は、この辺のほかに、浜の方へ行くと幸町の清水旅館さん、山本旅館さんとね、それから小伊勢屋さん、こつち行くと福井屋さん、勢友館さん、このそばの長栄館さん。あと緑町では若松湯さんが旅館やりました。高橋旅館さんが幸町の角の十五夜さんの一軒隣りやりましたね。

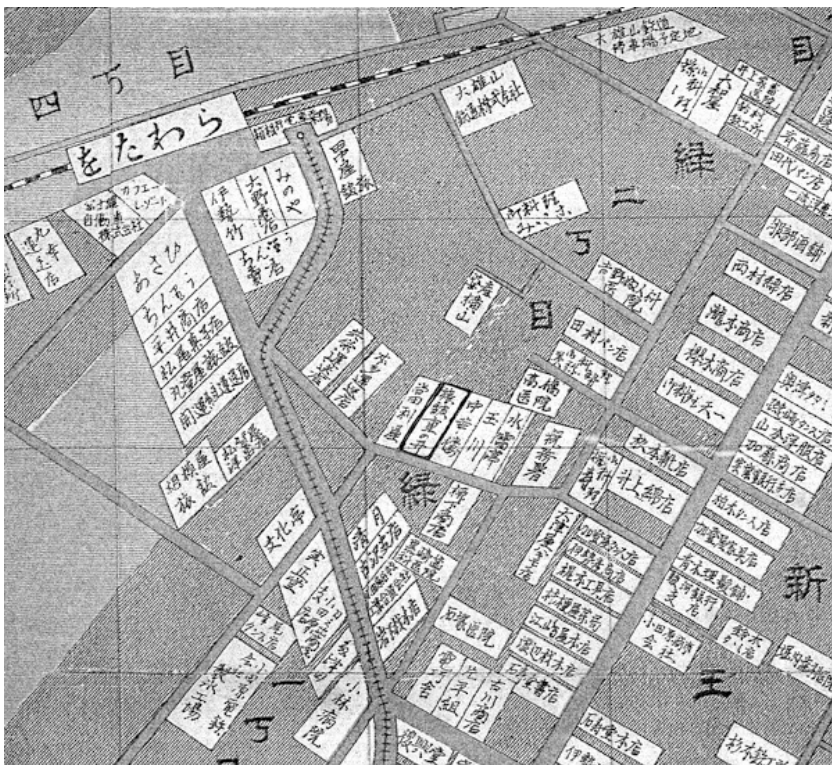
旅館は昭和五十八年(一九八三)までやりました。今は、歌は好きだからそういう番組をよく見えています。近くの公民館で月二回カラオケがあるから、はにかみ屋なんだけど昔の歌を歌ってますよ。

史談会は父も入ってまして、あたしも歴史が好きなんだから会報が出たりするのが楽しみなんです。昔のお話ができただけで、すごく嬉しいですよ。

(二〇一七年四月一六日)

(文責 青木良一)

「最新小田原案内図」大正14年7月25日発行 (著作兼発行人・米村六松)



新会員紹介

名前(敬称略) 住所

岸本章 湯河原町中央

会員の方へのお願い

— 新会員募集 —

小田原史談会では常時新会員を募集しております。郷土の歴史に興味をお持ちの方にぜひ会員になっていただきよう、お誘いください。申し込みは史談会役員または左記へ連絡願います。会費は年額三千円です。

小田原市堀之内三二一・五

電話 〇四六五・三七・七一八八

植田士郎



## 二宮尊徳と『論語』(二)

寺子屋石塾主宰

岩越 豊雄

## 報徳思想の由来

「報徳」と言う二宮尊徳の教えの由来も『論語』にあります。『論語』憲問篇三六にこうあります。

或る人曰く、徳を以て怨みに報いば如何と。子曰く、何を以てか徳に報いん。直を以て怨みに報い、徳を以て徳に報いんと。

「ある人がいった。怨みを怨みでかえすのではなく、怨みを情けでかえすということはいかがでしょうか。先生がおっしゃった。では、人から情けを受けたときに、どうかえすのか。怨みにはまつすぐな心でかえし、人の情けは情けでかえすということだ。」と意訳します。この場合「徳」とは恩徳のことです。広辞苑に、「恩徳」とは、めぐみ、なさけ。とありましたので、「情け」と訳しました。

『論語と現代』の著者である、私の父岩越元一郎はこう解説しています。

「いかに自分を悪くあつかう人に対しても、怨みを怨みでかえさず、徳でかえすようにしたら

どうでしょうかというのは、即ちキリストの言葉「汝の敵を愛せよ」のごとき意味である。孔子は、それは正しくない、それでは、自分に恩徳ある人に対する報恩とのけじめがつかなくなる。怨みには直をもつて対せよ、直とは、私情をはさまず公正実直にその怨みの不当を判断して、裁くべきは裁かなければならない。ただし、私情はさしはさんではならない。そして、自分に恩徳あるものに対しては、十分な恩徳を以てお返しせねばならぬ。恩讐(おんしゅう)同じく、徳を以て報いんとするは人情の自然の道に背いて偽善不義を増長させることとなる。「汝の敵を愛せよ」というときは、孔子の聖訓によつて考える時、判断を誤るものである。個人の小さな怨みも解決出来ぬものが、か

くのごとき大それたまねをしたら、おかしなことになるのは当然である」

二宮尊徳の『報徳』の精神は、この章の「徳を以て徳に報いる」という言葉からきています。

荒廃した桜町の復興も順調に

進みだした頃、尊徳を抜擢した、小田原藩の名君、大久保忠真(おおくぼただかね)公が、老中首座になり、將軍家斉(いえなり)の代参で日光東照宮に参詣します。その帰り道、結城で尊徳と面会します。殿様から桜町の復興について尋ねられた時、尊徳は「荒地には荒地の力があります。荒地は荒地の力で起し返しました。人にもそれぞれ、良さや取り得があります。それを生かして村を起しました」と答えたといいます。それに対して忠真公が「それは『論語』にある、徳を以て徳に報いる』あれだな」といわれたと伝えられています。

尊徳はその言葉に感激し「報徳思想」を練り上げたといわれます。因みに、『報徳訓』には、こうあります。

父母の根元は天地の令命に在り  
身体の根元は父母の生育に在り  
子孫の相続は父母の丹精に在り  
父母の富貴は祖先の勤功に在り  
吾身の富貴は父母の積善に在り  
子孫の富貴は自己の勤勞に在り  
生命の長養は衣食住の三つに在り  
衣食住の三つは田畑山林に在り  
田畑山林は人民の勤耕に在り  
今年の衣食は今年の産業に在り  
来年の衣食は今年の艱難に在り  
年々歳々報徳を忘るべからず

天地、祖先、父母、自分、子

孫と連綿と続く命のつながりへの恩徳に報いること、また、大自然の恩徳にも報いることが述べられています。『論語』の人から受けた恩徳が、『報徳訓』では人の根元的な生命ということから、命のつながりや大自然の恩徳に拡大され、勤勞によつてそれに報いることを教えています。

## 「徳」と「徳治主義」

「徳」は「恵」とも書きます。まつすぐな心で人生を歩む意味を表します。一般には修養によつて身につけた、すぐれた品性や人格の事を言います。

「徳」について触れた『論語』里仁篇二十五の章句にはこうあります。

子曰く、徳は孤ならず、必ず隣有り。

徳ある人は、周りに必ず共鳴者や親しい友人を得るといふことです。

徳は得なりともいいます。周りに得を与える「人徳」のある人であるならば、必ずその周りには自然に人が集まってくるようになる。人の心の真実は、必ず人の心を動かすのです。

また、孔子は述而篇三で、こう述べています。

子曰く、徳の修まらざる、学の

講ぜざる、義を聞いて徒(うつ)る能(あた)はざる。不善改むる能はざる。是れ吾が憂(うれい)なり。

「先生がおっしゃった。徳が身につかない。学び習うことが足りない。善いと思うことを聞いても行なわない。善くないことを直ぐに改めない。そうあってはならないと、私はいつも私のこころを戒めている。」

「吾が憂い也」という言葉にこもる孔子の嘆きの深さが偲ばれますが、その「憂い」は、孔子が自分自身の行いを憂えたのではなく、弟子達が出来ないのを心配したとする解釈もあります。「憂い」とは「出来ないから嘆いた」という意味とは異なっていて、「いつもそのことを心にとめて反省している」と捉えれば、己の戒めとともに、弟子への強い戒めともなります。「徳」が身につかないのは、「学び」が足りないからであり、「善い」と思うことを聞いても実行しないからであり、「よくない事」を改めないからであるに関連して捉えることも出来ます。

また、為政三にこうあります。子曰く、これを道(び)くに政を以てし、これを斉(ととの)うるに刑を以てすれば、民免れて恥(はづ)すること無し。これを道(び)

くに徳を以てし、これを斉(ととの)うるに礼を以てすれば、恥(はづ)ありて且つ格(いた)る。

「先生がおっしゃった。民を法律や政令で導き、それに従わせるために、刑罰で統御していくなれば、民は刑罰に触れなければ何をしても恥ずかしいとは思わなくなる。民を道徳で導き、礼で統御していくならば、民は不善を恥じるようになり正しくなる。」

この章は、「政令刑罰、すなわち法律万能を以て国を治めんとする、法治主義に対して、徳治主義を主張するものである。今日の政治においても、恥あるを知らしめる徳治が根本の策であることは言うまでもない。」と、諸橋轍次著の『論語の講義』の解説にあります。

二宮尊徳翁は、この章についてこう述べています(『二宮翁夜話』より)。

「孔子は之を導くに徳を以てし、之を斉(ととの)うるに礼を以てすれば、恥有りて且つ格(いた)る、といった。その徳をもって民を導くことは、固(もと)と)より教化の根本であつて、前章ですでに述べた。では、礼を以て之を斉うとは何をいうかといえ、礼の実は讓に有り。讓は分に生じるものである。何

を分というかといえ、今百戸の邑(むら)があつて、田畑の禄高を千石とすれば、それが邑の天分である」

この解釈からも、二宮尊徳翁は『論語』の、この章句を分度・推讓の、村興しの実践に生かしていたことが分かります。

積小為大

その報徳の実践方法の一つに、積小為大(せきしょういだい)という教えがあります。それに関連すると思われる『論語』の章句があります。

子曰く、譬(たと)えば山を為(つく)るが如し。未だ一簣(いっき)を為さずして、止むは吾が止むが如し。一簣を覆すと雖(いえども)、進むは吾が往くなり。

「先生がおっしゃった。ことを成すということは、たとえてみれば、築山を造るようなものだ。あと一簣(ひとつも)の土で出来上がるというのに、止めればそれまでで、自分が止めたことになる。それはまた、地を平にするようなものだ。一簣の土を穴に入れれば、それで一歩自分が進んだことになる」

まず、続けることの大切さを論じた教えです。止めるのも進むのも自分次第ということですよ。

二宮尊徳に「小を積んで、大を為す(積小為大)」という教えについて、尊徳の弟子の福住正兄(まささへ)の『二宮翁夜話』にこうあります。

「大事をなさんと欲せば、小さな事を怠らず勤むべし、小が積もりて大となればなり。およそ小人の常、大なることを欲して小さなことを怠り、出来難き事を憂いて、でき易き事を勤めず。それ故ついに、大なることなす事あたわず。それ大は小を積んで大となる事を知らぬ故なり。譬(たと)えば百万石の米と雖ども粒の大なるにあらず。万町の田を耕すも其の業は一鍬ずつの功にあり。千里の道も一歩ずつ歩みて至る。山を作るのも一簣(ひとつも)の土よりなる事を明らかに弁(わきま)え、励精(れいせい)小さなことを勤めば、大なる事必ずなるべし。小さな事を忽(ゆるが)せにする者、大なる事必ず出来ぬものなり」

「山を作るのも一簣の土よりなる事を明らかに弁(わきま)え、励精(れいせい)小さなことを勤めば、大なる事必ずなるべし」という言葉は、『論語』の言葉に通じます。「勤めれば必ずなる」の「必ず」



と言う言葉は強く確信に満ちています。

尊徳の子供向けの積小為大の教えにはこう有ります。

「一日に一字習えば一年に三百六十五字になるぞ、この小僧」

小僧とは子供に向けて親しみ深く呼びかけた言葉です。確かにその通りです。一日二字習えば七百三十字、三字習えば千九十五字にもなります。ただそれもなく、ああそうかで終わるのではなく、実際に実行し続けることが大切です。「継続は力なり」とも言います。

そういえば、小田原の二宮金次郎(尊徳)の生家に隣接する尊徳会館に、小箱に砂を入れた、漢字練習用具が展示して有ります。昔は、紙や墨は貴重品でした。ですから、その用具で、子供のころ金次郎は毎日のように漢字を練習したのでしよう。

漢字でなくても、何事も一日のうちには何かする事を決め、それを毎日続けられれば、大きな力になることは間違いありません。

大空にそびえて見ゆる高嶺にも登ればのぼる道はありけり

と明治天皇の御製にあります。

「大空に聳え立つ高い山、自分には到底登れそうにないなと思われる山でも、麓(ふもと)よ一歩ずつ歩めば、必ず頂に登

ることができるといふことです。

夢や目標を持ち、それに向かって一歩ずつ努力すれば、必ず夢は実現するという確信を与えてくれます。「夢は必ず実現する、実現しないのは、夢の持ち方が弱いからだ」といいます。

私が教員となり、始めて担任したのは箱根の小学校の三年生でした。その児童の一人に国際線のパイロットになった子がいます。特に成績や運動が優秀だったわけではありません。ただ、箱根の山々に囲まれた空を飛ぶ飛行機を見て、パイロットになりたいなど強く夢を描いたので。その後、実際にその夢の実現に向かって努力し、航空専門学校に進み夢を実現させました。八十才でエベレストの登頂を果たした、三浦雄一郎さんもこう言っています。「どんなことがあろうとも、ぶれずに『絶対に登る』という夢と希望、目標を持つことだ。それが僕を強くしてくれた」と。(つづく)



(カット 五十嵐祐子)

## 旅のつれづれ俳句日記

剣持 芳枝

相変わらず昔の旅日記となり、京都の四季の風情が好きな私のこと、又々句友のMさんと一緒の京の旅となった。その年の初夏の頃、早朝の新幹線に乗り「お天気でよかったわね」と言いかわした。十時すぎにはもう京都着。少し駅前をぶらぶらして予定していたロイヤルホテル内の吉兆で昼食となった。まずは二条城前よりバスで北野天満宮へ。此所は女学校の修学旅行で来たことがあり懐かしかった。その近くの千本釈迦堂、通称おかめ寺へ。本堂に入って沢山のおかめ人形を見て、庭でにこやかに笑っているおかめさんの石像が実に可愛いく、共に微笑んでしまった。夕刻国際ホテルに着いた。夜七時から舞妓さんと一緒に写真を撮る時間があり、カメラに収まった。その舞妓さんが池の中の舞台で祇園小唄を舞い楽しいひとときだった。私達の部屋からは二条城が真向かいに眺められ素晴らしい夜景だった。ぐっすり眠れて二日目の朝を迎えた。この日の観光は伏見稲荷、東福寺、泉涌寺と決め、バスから京阪電車に乗りかえてお稲荷さんへ。商売繁盛五穀豊穡の神様として名高い。山頂へ続く朱い千本鳥居は目の覚めるように綺麗な眺めだった。東福寺へは電車でも来ることがあり、立派な建物と庭が素晴らしかった。紅葉の頃は名所だけあって大層な賑わいであつたろう。禅寺として京では最大規模を誇る寺で、最古のトイレ(東司)なども見られた。泉涌寺へは初めてタクシーを使った。御寺とも呼ばれ皇室の菩提所で、観音堂の楊貴妃像の上品なお顔が華やかだった。縁結び安産などにもご利益があるそう。ずい分歩いたのでバスがホテルに着き万歩計を見たら二万歩近かった。よく歩いたものとお互いにびっくりした。今夜も舞妓さんの踊りを見て床に入った。

旅の三日目、今日は嵐山方面に行くことになり、一度京都駅に戻り荷物をロッカーに置き、嵐山行きのバスに乗った。賑やかな渡月橋が明るく塗りかえられたようだった。大きな土産物店で何やら大分買物をした。嵐山から又京都駅に戻りレストランで昼食をいただき、吹きぬけの展望台の途中の会場で、丁度中原淳一展が開催されていたので見られてよかった。五時にはホームに上り楽しかった京都をあとにした。小田原に着き車でわが家の玄関へ。「ただいま」の声に二階から「お帰りなさい」と一斉に声がして嬉しかった。

春惜しむ雨脚ほそき渡月橋

行く春や京の町家の長のれん



# 多古廻りの半日

青木 良一

## 小田原の小さな村

よく知られた落語の「寿限無」に出てくる長い名前の一部に、「くうねるところにすむところ、やぶらこうじのぶらこうじ、ばいぼ、ばいぼ、ばいぼのしゅーりんがん、しゅーりんがんのぐーりんだい、ぐーりんだいのぼんぼこびー」とあります。この「やぶらこうじ」は藪柑子(やぶこうじ)のことですが、去年の六月に『多古風土記』を出版された柳川明夫さんは藪柑子を自称されています。なぜなのかその謂れを尋ねたことはありませんが、庭に藪柑子がたくさんあるからでしょうか。

それはともかく、小田原史談会では「井細田・多古プロジェクト」として地元の人たちにも加わっていただき、地域の歴史の掘り起こしを試みていて、藪柑子さんはその中心メンバーです。

藪柑子さんは、『多古風土記』を紹介する一文(本書の楽しい読み方)に、「まず、口絵と本文の図を見比べてみて下さい。口絵の『迅速測図』は地図の寶石

です。その美しいフランス式地図の中に一三四年前の姿が輝いて見えます。小田原の小さな村の地理的な位置と景観をイメージとして持つて下さることをお願いします」と書いて、多古村へ誘っています。

その誘いにつけて私は、今年の二月、それもよりによつて春一番の吹いたその日に、藪柑子さんの先導で多古地域を巡りました。風と雨を気になげながらの半日でした。

## 出発は緑町駅から

集合は大雄山線の緑町駅に午後一時。藪柑子さんは長靴で登場です。参加は十余人。もう雨が降り出してきたので、挨拶は狭いホームの階段ですませました。

藪柑子さん手作りのパンフレット(『多古風土記』の世界を歩く)が配られる。一行は傘をさしながら(傘を持たない私は濡れながら)、まずは北へ向かう。

最初に足を止めたのは寺町の円妙寺でした。本堂の前で大黒さんが一行を迎えて、南足柄の呉地家がこのお寺の檀家となっ

た経緯を話してくださいました。かつては南足柄で、下田隼人と同じ檀家寺だったという。次第に雨足が強くなる。

池上の眼蔵寺に向かう。案内役の古文書の会(たこ乃部屋)の「親方」(別生さん)は、「みなさんはこんな道知らないですよ。行き止まりで車があんまり来ないから私は犬の散歩によく来るんです」と言う。

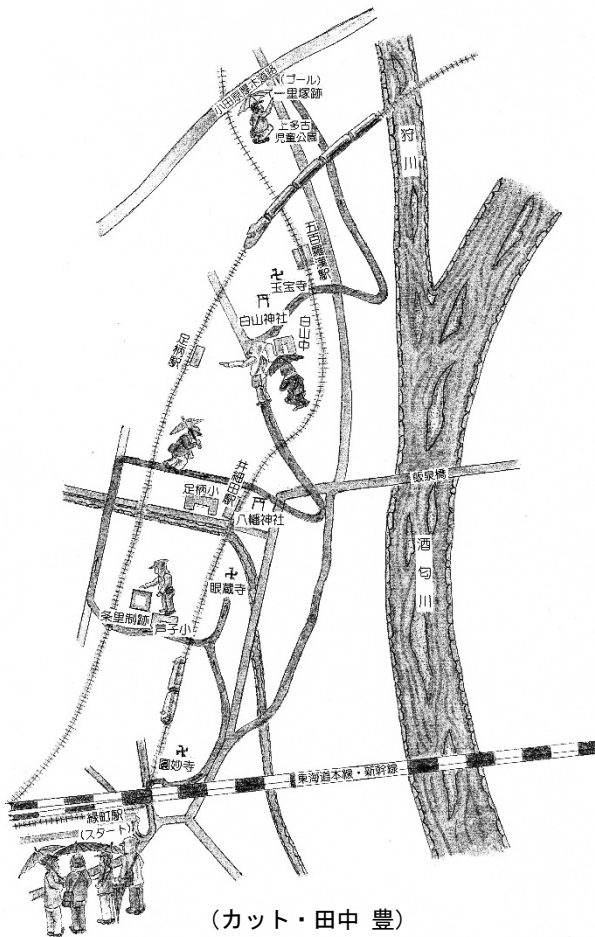
眼蔵寺前の稲荷神社では、親方が境内の水神碑の説明してくれた。なんでも江戸末期に池上村の名主の宮内太治兵衛が村人を引っ張って「池上堰」を作り上げたそう。

「荻窪用水を延長して池上まで

来ることになっていた。文書には池上村まで確約するって書いてある。ところがぎつちゅん。一八〇二年に出来た用水は荻窪止まり、どうしてくれるのよお。それで穴部用水をもらってやつと池上堰が出来たのが五一年もあとのこと」と、親方は雨も厭わずに、ときには池上堰に身を乗り出して話してくれた。

眼蔵寺の墓地で宮内太治兵衛の墓に参拝し、同時に開基の石巻下野守の話も聞いた。多古へ行き着く前にもう濡れきってしまつて、私は濡れねずみ状態です。

眼蔵寺を出て大雄山線の踏切を渡る。西の空は黒い雲で



(カット・田中 豊)



すっかり覆われている。芦子小学校の玄関の庇で暫しの雨宿り。「残念ですが、今日はこれで中止にしましょう」と親方あたりが言い出すのかと思いきや、さにあらず。藪柑子さんは長靴にヤッケ姿ですでに道に出ている。先を急ぎたい気持ちがありあり。雨風に立ち向かうこの長靴王子は、春一番などへっちららつて感じます。長靴王子の後ろに傘をさして数人、濡れねずみが数匹、ついて行きました。

### 「藪柑子ワールド」

振り返ってみれば、これから「藪柑子ワールド」でした。藪柑子さんは我々を早く条里制の世界へ引き連れていこうという魂胆なのです。

一行は、その痕跡だという芦子小学校の西側に導かれました。西側の、北へ向かう一本道は私も何度か通ったことがあります。ただ真つ直ぐという印象はありません。知らなかったです、こんなところに条里制の跡が残っているとは……。

三年ほど前、奈良の法隆寺近くで条里制を見たことがあります。「小吉田」という斑鳩町の吉田寺の南に広い田んぼが広がっていたのです。炎天下、わざわざ見に行きました。ほんとに広がった。それに比べると此処は

ずいぶん狭い。

芦子小学校の西側辺りは一町四方の正方形になっていて、藪柑子さんが多古に条里制があったと発想したきつかけの一つだそうです。

藪柑子さんが、「ここが二の森微高地。ここから一〇八メートルのところには道があります。向こうまで何歩あるか数えてください」と言うので、みな思い思いにカウントを始める。私は一三一步。一〇八メートルが「坪」の一辺だと言われた。

「壱町田」というのは、一条一里一坪番地の水田という意味だそうです。今風に言うると一丁目一番地か。藪柑子さんには、この地に「多古の条里制跡」という碑を建てたいという思いがあるようだ。

雨が止んでいる。「壱町田」が終わってこれからどこへ行くんだらう。雨が降っていたからガイドマップはリュックに入れたまま。空を見上げると、南の雲間に少し青空がある。

### 歩く、ぶらぶら歩く

小田急線の踏切を越えて、「池上の庚申塔」に出た。「この手前の石が道鏡の腰掛石です」なんて声を聞いた。その昔、道鏡がここを通りかかった際に村の娘がお茶を出したという話が伝わ

っているとか。そのころお茶があったのかなあ。

市役所の東側の端っこから真つ直ぐ北へ向かう道をぶらぶらと歩く。これも条里制の道か。このあたりには「西門坪」という地名があったそうで、藪柑子さんは「条里制の西角の境界を示すんだと思われます」と言う。

道下には排水路が通っているという。田んぼの用水跡か。久野川を渡るころ、また雨になる。暫しセブンイレブンで雨宿り。ここで「脱落志願者」から相談を受けました。

再び歩き出して看護専門学校あたりで、向かいのパン屋さんには美味しいという評判を聞く。小田急線の踏切を東に向かって渡ると、「脱落者」は足柄駅へ姿を消した。残された我々には、これまで以上に長い道のりが待っていた。

広くもない真つ直ぐな道をさらに東へ歩く。これも条里制の道なのだそう。井細田のバイパスを渡り、ガソリンスタンドの脇を通って旧道(甲州道)に出た。この道を土地の人は「往還道」と呼んでいて、矢倉沢往還道の意味だろうという説明だ。行き交う車を避けながら、藪柑子さんからしばし「井細田と多古の境」の説明を受ける。話に出ていた「壱町田」がこの辺

りだというのが、家が密集していて、どこが壱町田やらさっぱりわからない。よく話を聞こうと気を取られていると、傍らを通る車にクラクションを鳴らされたよ。

旧道を歩いて「飯泉入口」のバス停あたりで、また藪柑子さんの説明が入る。少し昔は、分かれ道を東へ向かうと飯泉観音に通じたそう。また、ここに穴部用水が通っていて「出土橋(でどばし)」が架かっていたという。白山中学方面へ向かう道は「久野道」と呼んでいて、道の端まで多古の丘陵が削られたという説明だ。

### 「上多古の一里塚跡」まで

歩道橋を渡って白山中学へ行



(カット・田中 豊)

く。ここには多古城があったんだという。中学では屋上から四方を眺める機会を用意してくれたものの、雨はないが春一番が吹きまくるので早々に退却。

隣りの白山神社に移動する。社殿のもと地盤が中学の屋上の高さまであったものを、昭和三十年代に削って現在の姿になったという。

「多古の切り通し」を抜ける。五百羅漢の脇にある剥き出しのローム層に、「貴重だけど、開発されずにいつまで残るんだろうねえ」と言い合う。大雄山線の踏切を渡り、狭い刑場跡を一回りして、酒匂川のダルマ尻を上流に向かい、小田急線のガードをくぐる。

上多古の児童遊園地に着く頃は、もう午後の四時半に近い。ここは「榎道(えのきどう)」と呼ばれていたところで、かつては一里塚があったという。

児童遊園地の片隅に一里塚跡の石碑を見つけた。甲州道の傍だ。「石の向きが少し違うようだねえ」と勝手に言っているうちに、「このへんで解散」と相成りました。雨はすっかり上が



多古の悪ガキの思い出(一)

中村 泰良

今から五十数年前、幼友達と魚捕りなどいろいろの遊びをしたことを懐かしく思い出すようになり、メモなどしたものをまとめてみた。当時の遊びはものがない中、知恵をしぼり、色々な遊びを考えた工夫してつくりだしたものである。

朝から暗くなるまで一日中太陽の下、外で遊ぶ楽しさ、着ている服が泥だらけになっていつもお袋から怒られたことをおもいだします。でも、当時これが我々子供たちの生き甲斐だった。

多古の松明

今から五十数年前、多古では毎年八月十六日のお盆の時期に先祖の霊をむかえたあとの送り火として、自治会(下多古、中多古、上多古、内多古)の各組が総出で松明をつくり、酒匂川の土手に穴を掘りそこに松明を立て(今のお地蔵様の反対側に等間隔に立てた)勇壮な火祭りを行っていた。

当日は朝から組内の家に集まり、事前に乾燥させて集めていた「菜種油の枝や藁」を松明の芯にする竹のまわりに束ね、三十五センチ位の太さにし、周囲を炭

俵の菰で被い縄で固く縛ると完成である(芯の竹は、長さ三〜四メートル位の古い物干し竿を使った記憶がある)。

出来上がったら松明を担いだり、リヤカーで土手に運び穴を掘って立てる。夕方になると五百羅漢から方丈さん(お坊さん)を招き経をあげてもらい、各組から集まった松明に一齐に火がつけられる。炎がゆれ、火の粉が舞い、夏の夜空をあかあかと照らす勇壮な火祭りのはじまりである。対岸の飯泉でも何本かの松明が見え、多古と飯泉がお互いに競いあっているようだった。多い時期には二十本以上が立てられていた。

なお、ちょうどこの日は御幸ヶ浜でも大松明が催され、高さ十メートルぐらゐの松明が燃やされている写真が家に残されている。いつの頃からかこの行事も行われなくなり寂しい限りである。いつかまた何かの機会があれば復活させたいと思っているが、現在では多数の車両等の通行や土手際まで人家が建ち、事故や火災等の危険があるため実施は難しい状況である。

ぶったたき

酒匂川は昔から鮎の名所として有名な河川である。小さい頃から近所の悪ガキ同級生等と一日中魚捕りをした思い出がある。捕

れる魚は、鮎、うなぎ、うぐい(あかつばらやばあなどの呼称あり)、はや、なます、すがに又はつがに(はさみに毛あり)などである。

岸寄りの膝から下の水深の浅いところ(二十から三十センチ)では鮎などが泳いでいる姿が見えるからといって、素手で捕まえることはできない。そこでこの「ぶったたき」という方法の出番である。泳いでいる魚の背あたりをめがけて、針金をおもいきり振り落とすと魚の背に命中し、浮いてきたところを素手で捕まえるのである。ぶったたきの材料である針金は直径約三ミリ位の太い五番線の針金で一メートル半から二メートルの長さにし、持ち手部分を折り曲げ布を巻いて持ちやすいようにする。今ではこの漁法は禁止されているが、誰が考え出したものかは判らない。

魚籠(びく)などないため、捕れた魚は河川敷の枯れ枝や針金にエラを通して持ち帰った。

毎年六月一日の鮎の解禁日は友釣りを楽しみにしているが、この十数年釣果はよくない。鮎は六月一日から十月十五日までの友釣り、チンチン釣り、流し釣りなどと、産卵を終えた十二月の落鮎コロガシ釣りである。酒匂川は投網通年禁止。河川は内水面漁業調整規則で魚期と魚法を決められている。(つづく)



## 片岡日記 昭和編 (十)

片岡 永左衛門

昭和三年四月

六日 晴

午前、加奈子と小峯の花を久々にて見むと八幡山通り中学校裏より大久保神社に出れば、花は二日計りも早し。社は震災後復旧不充分にて瑞籬(みずがき)の石材も破損のまゝなり。当社は信徒のもの、大久保家のものに非れとも其理由か大久保家にも充分の保護なしと聞くも、然れとも目前の有様にてハ大久保家の鼎(かなえ)の軽重の感有り。同家も十五銀行の閉店にて巨額の損失なりと。其以前に此内の幾方をか当社維持二寄付したらむにハ一挙両得ならむなと思なから下を下る。

昨年建設ノ忠魂碑を見る。筆者ハ東郷元帥也。落款の文字大ニ過る感有り。此他に三つの遺憾有り。石垣に如何にして旧城趾の石材を用ひず新石とせしか、震災前の断碑は現碑の下に埋めしと。完全ならざるも有る丈継合して別碑とせさりしか。碑背の人名ニ戊辰箱根の戦死者高瀬某を除きしか。他村の人と雖も一人除きハ少量なり。委員に其人を消さりし為か。花は何れも一兩日早きも中学校下より離れば春色何とも言れず、散歩の好適地なり。二宮神社に立寄り夫より堀端の花を見ながら帰る。午后より大磯岸岡さんの淘席、五時帰宅。

七日 晴

東京より淳子来る。三時半発にて細君眼病ノ件親一方二行く。夜二入り雨。

八日 晴

昨夜の雨晴れ好天気南画展観覧の為メ上野に行くも無し。博覧会ハ門前を素通り、久々にて東照宮ニ参拝。花は殆ど満開。

紫の雪かあらぬか咲花の

木末(梢)に高く仰く高塔

荒井氏ニ立寄、品川十二時式十分発にて帰宅。淳子七時帰京。

九日 曇

武蔵野会見学の件にて松岡氏二行。西海子通りハ両側の花満開、隧道の如し。岩下氏ニ悔に寄り鉄道の隧道を抜、足柄より寿昌寺に至り帰宅。何も(何れも)春色至る処にた、よふ。

十日 雨

午後、大善寺淘席五時三十分発にて熱海行、石田様にて淘席。気車の沿道より何れも桜花、魚見崎も満開。

行先も是も桜の花の旅ひ

かりねの床の夢もかほりて

十一日 晴

帰途、福浦に立寄る。七時より山本淘席。

十二日 晴

午後、和田英作画伯来られ石垣山に全行。しはらく写生。入生田に下り、塔之沢にて夕食の馳走となり九時帰宅。

十三日 晴

十四日 晴

午后江守中学校長堤運平と全行。久野諏訪の原総世寺に行く。門を入は(れば)落花は満地の雪。

いにしへのあとをたつねて諏訪の原

花の雪きふむ春の山寺

什物嘆十王画幅を見て梵鐘を拓本に取る。全寺本尊前の須弥壇ハ珍物にて長凡九尺、巾四尺、高さ又四尺の松の一木にて後口はくり抜きたり。昔し門前に有りし木より取りたりと。関門を出むとすれば落花の雪、足もたゆたふ。

ふむもおしふまつは如何に桜花

雪と散りしく山寺の庭

五百羅漢より電車に乗り七時帰宅。

十五日 晴

午後より国府津嶋田様淘席。五時帰宅。

十六日 晴

報徳講発会式ニ報徳神社二行き堤氏ニ立寄る。午後小宮氏来談。夜二入り外郎氏淘席。

水上の落花

散り漂を風のまに〜ふきよせて

花と水との色ろ別れゆく

十七日 晴

今日請願書式通を郵送した。町長とんな顔をするか。

請願書

小田原旧城内二ノ丸ハ領主大久保氏ノ居館ナリシニ、廃藩置県ノ為領主ハ城外ニ移転シ、居館ハ足柄県ノ庁舎トナリ、明治六年八月廿八日

明治天皇陛下ノ行幸在セラレシ聖蹟ニ付、為

紀念小田原町ニ於テ建碑相成度、此段奉請願候也。

昭和三年四月十七日

小田原町長 吉田淳一殿  
片岡永左衛門

請願書

明治九年九月十三日

昭憲皇太后陛下ノ小田原町立女学幸学校ニ  
行啓ノ事蹟ヲ為紀念小田原町小学校内ニ小  
田原町ニ於テ建碑相成度、此段奉請願候也  
昭和三年四月十七日

片岡永左衛門

小田原町長 吉田淳一殿

午後五時三十分発にて熱海石田氏洵席二行ク。

十八日 晴

十時熱海より帰宅、午後よし来る。

十九日 晴風

細君眼病診察に上京。

大磯洵席ニ出張、五時過ぎ帰宅。

東京稅務監督局長青木得三氏より土地賃貸調査  
委員ノ謝状来る。

廿日 雨

瀬戸秀兄君、小田原藩史の件にて来談。

廿一日 曇

明日、武蔵野會員諸氏の当地見学の約あれば大  
蓮寺上人に依頼し置たる傳肇寺文書六通を借用  
し、帰途杉山松五郎ニ立寄、松原神社誌の史料  
ニ祭典の太鼓の囃しを聞。七時帰宅。

廿二日 雨

総世寺に遊たるを再度思出して記す。

四月中の四日総世寺を訪ひ半日の閑寂を味ひ、  
院主と総門にて手を別ちしも花に心のおしまれ  
見返れば、中門を今入らむとする院主に落花の

ふりかゝりゑも云れす。

送りきて手をわかちたる法の師の

帰る夕へを花の散りける

廿三日 晴 寒し又冬

夕刻、岩下清之助来訪。昨年宮内省より払下た  
る旧城地ニ学校建設ニ予定ノ処、敷地不足ニテ  
城堀の埋立ヲ町会ニテ決議セシヲ、保勝会其他  
反対町民大会を為し非常の悪化ニ付、何とか折  
合付たく其否ニ付協議し度との意味にて相談有  
り。明日午后より報徳社ニ会谈ヲ約す。

廿四日 晴 今日も冬の如し

午後より報徳社ニ至る。会する者、今井廣之助、  
松岡彰吉、岩下清之助、大角物兵衛、小嶋正治、  
岡崎勇次郎、石黒清二郎、拙者ノ八名なり。町  
長吉田淳一氏の出席を払下より決議の経過を聴  
取す。

廿五日 晴 寒し

午前九時報徳社ニ至る。今井廣之助病氣にて出  
席せず。町議及反対側の意見を聴取。警察署長  
二面会。

廿六日 晴

若江先生御出席。午前中免(面)会。午後より  
御洵席。

廿七日 晴

足柄史料校正第一回分、村松に送る。  
午後より報徳社ニ会合、明後三十日知事に面会  
の為登庁をなす事とし、散会。

廿八日 晴

廿九日 晴風

本日は武蔵野會員見学の筈なれば、指導の為メ  
九時半発電車にて足柄に下車、来会を待。十時  
廿五分会旗を先ニ、三輪善之助、中嶋利一郎、  
佐々木庄藏老を始、甘人下車。拙者の出迎を深  
謝、荻窪寿昌院ニ至り梵鐘を見る。朝鮮鐘ニ非  
ず日本鐘ナリト。時代ハ調査ノ上報告を約し文  
字鐘座を拓取す。

夫より蓮上院ニ至り、松原神社本地仏十一面觀  
世音を開帳す。鎌倉或ハ以上の製作ナラント。  
夫より山王口ニ至り北条番の門口篠曲輪、捨曲  
輪及ひ天正役ノ戦況など説明し、唐人町通り旧  
城天守台に登り説明し、帰途本丸堀際の大槓の  
元にて紀(記)念撮影し、報徳社にて中食中ニ  
北条時代の小田原図(拙者所蔵)、傳肇寺文書六  
通を展覧す。

食後、小峯通り居神社ニ至り境内の文保、元享  
の古碑と先日拙者の発見の野面石に五輪塔を彫  
刻せしと五輪塔を線彫刻を見せしに、拙者と同  
見鎌倉時代のものなるべく、文保、元享の古碑  
ハ板碑の類にて、只用材を得るの難易より、材  
料ヲ異にせしものなるへしと。拙者の研究には  
此地方の古寺院には無彫刻の山ヘンコの石碑を  
見る事あるは建設の当時ハ文字を墨書せしも年  
月を経るに随ひ風雨に消滅したらむかと考へ居  
りしに、今會員の談話によれば中国地方には石  
面に墨書せし実例の古碑ありと聞きたり。會員  
の一人は此境内にて弥生式土器の破片を拾ひた  
れば、前住民の有りしなるへきか精調の要あり。  
夫より松岡彰吉君の安(案)内にて石垣山に至  
る。諸々を尋ね布目瓦を得たるか、鎌倉末期の  
ものなるを確めたれば、拙者の土肥氏の築城説  
ハ裏書を得たり。  
風祭より乗車し幸町にて下車。一行と別れ、尾  
崎に立寄り入浴して帰れり。



平成29年度

## 総会報告

小田原史談会

○日時	平成29年5月6日(土)	13時~14時
○場所	おだわら市民交流センター 第1、2会議室	

司会 鳥居泰一郎(史談会理事) 議長 田中 豊(史談会理事) 書記 青木良一(史談会理事)

議事次第

第1号議案 平成28年度事業報告

1. 一般報告

- ・総会で確認された平成28年度事業計画に沿った活動を実施した。  
広報活動として会報「小田原史談」を年間4回定期発行し、研修活動については「史跡巡りの旅」を年4回企画したが、諸般の事情により、3回実施にとどまった。今後は更に慎重に計画を練り、実施できるよう努める。
- ・歴史講座「小田原史談会セミナー」を年3回定期開催し、各回とも多くの聴講者を集め好評を博したが、第16回については講師都合で実施を中止した。
- ・定例理事会を毎月定例開催し、その都度事業計画の実施状況を点検し、新規企画や新たな実施計画を検討した。なお毎回議事終了後「役員研修」を実施した。

2. 関係団体との交流・他

- ・小田原市文化連盟の構成員として、小田原市民文化祭に参加した。
- ・「小田原・足柄歴史研究六団体」との協力・連携を引き続き強化し、第4回「小田原・足柄歴史六団体合同展示会」を平成28年6月に開催。歴史解説パネルを展示した。
- ・NPO法人小田原生涯学習センターと協力して「公募型市民講座」として「小田原史談会セミナー」を年間3回開催した。
- ・「北条氏政、氏照公墓前祭」に参加した。
- ・「おだわら市民交流センター(UMECO)」に加盟し、各種講演会、理事会その他の行事を行った。

3. 各事業委員会報告

(1) 広報委員会報告

- 会報4回発行 平成28年4月 第245号(28頁)「新名学園創立者 新名百刀の軌跡」など
- 平成28年7月 第246号(28頁)「果てのない雲の嘶ー祖父と私の小田原謡曲史ー」など
- 平成28年10月 第247号(28頁)「明石人骨の発見者 直良信夫を語る」など
- 平成29年1月 第248号(32頁)「一心太助は鮑屋でい」など

(2) 研修委員会報告

1. 総会時の講演会 平成28年5月7日(土) 演題 「明石人骨の発見者 直良(なおら) 信夫を語る」 — 松本清張「石の骨」のモデルとなった研究者— 講師 杉山幾一(博久)氏(元小田原市文化財保護委員)
2. 史跡めぐり 下記②より「キャンパスおだわら」等による会員以外の方々への参加呼びかけ。
  - ①早川上水周辺史跡めぐり 平成28年5月21日(土) 参加者 10名
  - ②武田氏ゆかりの史跡と山梨県立美術館めぐり 平成28年11月22日(火) 参加者 33名
  - ③武蔵一宮氷川神社と鉢形城址めぐり(初詣) 平成29年1月17日(火) 参加者 40名

3. 理事研修

- ① 片岡永左衛門日記輪読 月1回
- ② 大森氏勉強会 9月より 月1回

4. 会員参加によるプロジェクト発足 井細田・多古地区を対象に会員参加による歴史探訪をスタート

(3) セミナー委員会報告

- 年間3回の歴史講座を開催 第13回 平成28年5月28日 「北条時代の小田原」 講師 渡辺千尋氏
- 第14回 平成28年8月27日 「江戸時代の小田原」 講師 山口剛志氏 第15回 平成28年11月19日 「火の国イタリアと日本」 講師 杉山浩平氏
- 平成29年2月については、講師都合により「休講」。

第2号議案 平成28年度 一般会計報告(別項)、特別会計報告並びに監査報告

第3号議案 平成29年度 事業方針

1. 基本方針

- ・小田原史談会の基本方針にそって、会員とともに発展する史談会を目指す。
- ・小田原史談会の活動の充実・強化を図る活動として、会報「小田原史談」の定期発行を継続するとともに、内容の一層の充実・強化に努める。
- ・史跡巡りは会員数減・高齢化に伴う参加者減の為、年2回程度の実施とし、会員外への参加を呼びかける。
- ・「史談会セミナー」については、平成29年度中は一時「休講」とし、これまでの成果を検証し、新たな企画を含め平成30年度再開・開講をめざす。
- ・ホーム・ページを常時点検し、親しまれ充実した内容の提供に努める。
- ・小田原・足柄地区の歴史研究団体との交流・連携を引き続き重視し、地域の歴史・自然・文化の発展を協力して進めるほか、関係団体との協力を強める。
- ・会員の高齢化などの進行に伴う会員の漸減傾向に対応するとともに、運営経費の節減・合理的運用に努める。

**第2号議案**

2. 各事業委員会の活動計画

(1) 広報委員会活動計画

① 会報「小田原史談」の定期発行(年4回)、平成28年度行ったアンケート結果に基づき、内容を充実させるとともに、より読みやすい紙面作りを目指す。

② PDF化された既刊号記事の活用を検討する

③ 貴重な「埋もれた歴史資料」の発掘、公表に協力する

④ 更なるホームページの充実と活用を図る。

(2) 研修委員会活動計画

① 総会時の講演会 平成29年5月6日(土) 演題「後北条以前の小田原—政治、社会状況からみる鎌倉・室町時代の小田原地域—  
講師 野村 朋弘 氏 (京都造形芸術大学准教授)

② 史跡めぐり

平成29年10月に伊豆方面、初詣に浅間神社方面を検討中

③ 理事研修 平成28年度に引き続き片岡永左衛門日記輪読 大森氏勉強会を予定

④ 会員参加プロジェクトの継続実施 第4号議案 平成29年度一般会計予算(略)

第5号議案 平成29年度新役員案

役職	氏名	役職	氏名
会長	※松島 俊樹	会計	※平倉 正
副会長	※平倉 正	会計監査	佐久間 俊治
副会長	※田中 豊	会計監査	※石井 艶子
副会長	植田 士郎		(※) 新任

以上の総会議案はすべて満場一致で承認されました。

**1.平成28年度 一般会計決算報告**

**収入の部**

項目	H28年度予算額	H28年度実績額	実績-予算	適用
前年度繰越金	244,706	244,706	—	27年度繰越金
会費	800,000	798,000	-2,000	個人会費 @3000
賛助会費	250,000	250,000	—	賛助会費 @10000
雑収入	500	15,902	15,402	「会報売上」、「寄付金」、「預金利息」
セー会計繰入	-	71,372	—	28年度史談会セミナー会計残高繰入
計	1,295,206	1,379,980	13,402	

**支出の部**

項目	H28年度予算額	H28年度実績額	予算-実績	適用
総会費	50,000	35,742	14,258	27年度 定期総会 資料・講演会等諸費用
会議費	20,000	29,500	-9,500	理事会開催諸費用
通信費	5,000	15,432	-10,432	諸会議招集通知等 郵送費用
会報発送費	60,000	55,596	4,404	会報「小田原史談」会員宛発送郵送代
交際費	40,000	37,240	2,760	関係諸団体会費、慶弔費、ほか
務消耗品費	30,000	31,655	-1,655	事務用消耗品(用紙代 その他)
振込手数料	15,000	11,058	3,942	会費等郵便振込 手数料
印刷費	15,000	16,292	-1,292	諸会議資料・アンケート等 印刷費
HP管理費	5,000	3,000	2,000	ホームページ維持・管理費
会報印刷費	740,000	711,720	28,280	会報「小田原史談」印刷費 ㈱アルファ
専門部会費	20,000	-	20,000	28年度 支出実績なし
ロッカー借用代	15,000	9,600	5,400	UMECO ロッカー借用代(2台)
会場費	24,000	41,340	-17,340	理事会等会議室借用代 UMECO
予備費	256,206	30,684	225,522	既刊史談会PDF化事業費等
計	1,295,206	1,028,859	266,347	

平成28年度一般会計収支決算

収入	1,379,980
支出	1,028,859
残高	351,121

**監査報告**

会計監査の結果、一般会計、特別会計ともに帳簿の処理、領収書・証憑の管理など、適切に処理されていたことを報告します。

平成29年4月4日

会計監査 佐久間 俊治  
会計監査 高田 知子

小田原史談会 秋の史跡巡り

《北条氏ゆかりの城跡巡り》

- 日時 : 平成29年(2017年)10月24日(火)  
 集合 : 午前7時50分 小田原駅西口 北条早雲像前 (8時出発 小雨決行)  
 行き先 : 静岡県東部  
 行程 : 小田原 — 山中城跡 — 興国寺城跡 — 昼食 — 長浜城跡 — 韮山城跡 — 小田原  
 案内 : 興国寺城跡および長浜城跡・沼津市立歴史民族資料館館長 鈴木裕篤氏  
 募集人員 : 40名 (申込み先着順)  
 参加費 : 6,000円 (昼食代込み、当日集金します)  
 申込方法 : 9月1日から9月30日まで  
 NP0 法人 小田原生涯学習推進員の会 (キャンパス小田原) 電話 : 0465-33-1890  
 お問合せ : 小田原史談会 電話 : 090-6938-3796 (松島)



特別賛助会員

紳士服の **アメリカヤ**

和 そば 小田原城趾前 田毎

税理士法人 **報徳会計**

のれんと味 **交る後**

**伊勢治書店**

**ちんまう本店**

 **かまぼこ**

割烹料理 **鳥かつ楼**

(株) **オクツ薬局**

**和菓子 菜の花**

 **小田原ガス**

**杉崎茂法律事務所**

**小田原報徳自動車**

**平井書店**

かまぼこ籠 **清**

 **株式会社 鮎屋**

**かみやま小児科クリニック**

**株式会社 報徳**

**興電社**

**COMTEC コムテック株式会社**

建築金物 (株) 星崎仲吉商店  
家庭金物

**さがみ信用金庫**

学生専科  **マルク**

(株) **アルファ**

曾我の梅干 **美の政**  
塩辛・かまぼこ

小田原史談(年四回発行)  
創刊昭和三十六年一月  
会創立昭和三十年七月

禁無断転載

振替  
年会費 普通会員三千円  
〇〇二〇〇三六四三三三六  
小田原史談会

小田原史談会ホームページ URL <http://odawara-shidan.hustle.ne.jp/>

小田原史談会

検索

落穂集

▼五月の小田原史談会総会に引き続き続いて行われた、野村朋弘氏の講演会は大盛況でした。想定  
の二倍以上の聴講者が詰めかけ、多くの皆様は  
二時間立ったまま、また一部の方にはお引き取  
り願う事態にもなりました。当方に見通しの甘  
さを反省し、今後の参加募集の方法を見直しま  
す。それにしても、後北条以前の小田原の歴史  
に、これだけ多くの人が関心を寄せていること  
を実感した一日となりました。今後の企画に大  
いに活かしていく所存です。▼この時の「講演  
録」を、今号と次号に分けて掲載します。聴講  
できなかつた方はもちろんですが、聴講された  
方も目を通していただくと、より理解が進むと  
思います。▼前号で予告したとおり、今号から  
「井細田・多古」シリーズを開始します。この  
シリーズに該当する記事には、冒頭のタイトル  
に「井細田・多古」マークを付けました。▼「片  
岡日記」の表記については、いろいろ議論があ  
りました。先ず読みやすくするために、今号か  
ら漢字は旧字体をやめて常用漢字とすることに  
しました。仮名遣いも変更したらという意見も  
ありましたが、「史料的价值」を考慮して、小変  
更にとどめるという判断となりました。また、  
「片岡日記」は小田原の近代史にとって重要な  
資料ゆえ、今後更に内容に踏み込んで理解した  
いと考えます。▼この五月で史談会会長が交代  
したことは皆様ご存じかと思えます。平倉正・  
前会長は六年間、小田原史談会をリードして来  
られました。今後は、松島俊樹・新会長の下で、  
更なる発展を誓います。(編集子)

「小田原史談」原稿募集  
論考・紀行・証言等の原稿をお待ちして  
おります。お問い合わせは左記へ。  
〒二五〇一〇一五  
南足柄市関本七三〇一六  
電話 〇四六五二七三二〇八七九

荒河純